

---

# 遙か先の道で ~ LIMITED ~

サイフィア

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

遙か先の道で〜LIMITED〜

### 【Nコード】

N9979G

### 【作者名】

サイフィア

### 【あらすじ】

つまらなかつた日々、変化のない日常はもうそこにはなかつた。遙か先へ続く道、俺たちは今度こそ歩き出すーーーーー前作《遙か先の道で》の第2期の作品で、個性豊かなキャラクターのそれぞれの詳しい話を追加。新キャラクターも登場する予定。そして、由来漣音に眠る白い影、新たな別れと出逢い、衝撃的なクライマックスーーー最後までおつきあいください。

## 第1話：終わりの季節

夏にはいると

受験生というのは

普通、夏期講習とかに  
行くらしい。

だが俺は行こうとは  
一度も思わなかった

あの日、

俺が渚に告白してから

1週間が経とうと  
していた。

俺は渚の家にバイトで  
行っていた。

しかし、定食屋といえど  
、こんな小さな町だ。

はつきり言って

客は来な

玖珠：「ガツンッ！…

さつきから

何言っただよ、小僧！」

漣音：「いきなり

金属バットで

襲ってくるなよ！

死ぬぞ、本当に！」

俺は間一髪のところ  
で避けていた。

玖珠：「お前がさつきから  
ごちゃごちゃ  
ごちゃごちゃと  
変なことぬかすから  
だろうが！」

漣音：「…ていうか古今も  
あんたも人の心の中  
勝手に覗くなよ！」

玖珠：「簡単に覗かれる方が悪いんだよ！」

こんな毎日を過ごしながら  
俺は心のどこかで  
こうなることを  
願ってたかもしれない。  
… 願う というと  
仙里のことだが、  
あのあと緊急治療室に  
運ばれて、命に別状は  
なく、今は入院中  
だそうだ。

《終わりの季節》

玖珠：「チリンチリーン…  
暑っちなあ〜」

漣音：「そうだなあ〜」

俺は扇風機の前に  
座っていた

玖珠：「おい！  
大黒柱をさしおいて、  
人ん家の扇風機を  
独占するとは  
いい度胸じゃねえか！」

漣音：「別に  
いいだろおお〜。  
環那さんも渚も、  
買い物で今いない  
んだしいい〜」

玖珠：「なら、  
今が好機だな。」

漣音：「あああ〜？  
何のおお〜？」

玖珠：「勝負だ小僧！」

漣音：「は、勝負？」

玖珠：「ほら！  
早くいくぞ！」

漣音：「勝負つて、  
どこに行くんだよ」

玖珠：「決まってるだろ！  
場所は……！」

おっさんが指をさした  
方向にあつたのは

漣音：「……野球場？」

玖珠：「おうよ！  
今日は天気も良いし、  
誰もいねえ。  
マーベラスベスト  
コンディション  
じゃねえか！」

漣音：「いや、  
意味わかんねえよ。  
どんだけ凄いなだよ  
今日のこの天気がつ！」

玖珠：「いちいち  
うるせえな、お前は」。

……肩はもう大丈夫  
なんだろう？」

漣音：「無理に  
決まってるんだろ。」

本当にあの時のことは  
思い出したくもない」

玖珠：「へっ！

いまでこそ

いきがってるやつが、  
昔はリンチを受けるほど  
弱かったなんて、  
想像もできねえぜ！」

漣音：「あれは

あいつを守るためだ！

……そこまで言うなら  
受けてやるうじゃねえか  
、おっさん！」

玖珠：「いきがってん  
じゃねえぞ、小僧お！」

こうして、

夏の始まりは訪れてた

「ザザ

ザザーーーーー！」

漉音：「雨だな」

玖珠：「マーベラス  
ベストコンディション  
があああ！！」

ちっ！

しょうがなえか。

おい、小僧！

今日は中止だ！  
家に戻るぞ！」

漉音：「ああ！

わかったよ！」

……この物語は、

小さな少女が俺に見せた

ほんの、短い希望に

満ちたお話の続きー

玖珠：「環那ー、  
今戻ったぞ」

環那：「おかえりなさい  
由来さん」

漉音：「あ、えーと……  
た、ただいま」

玖珠：「小僧に  
負けたあーあつ！」

漣音：「そこまで  
悔しがるなよ」

渚：「おかえりなさい  
お父……由来君」

玖珠：「何故我が娘よ  
途中から小僧に  
切り替えたあーあつ！」

漣音：「いちいち  
うるさいっ！」

渚：「嘘ですよ、  
お父さん。今日もまた  
野球ですか？」

玖珠：「いや、  
おてんとさまのご機嫌が  
ななめみたいでな」

環那：「まあ、  
話もここでは  
なんですので居間に」

とまあ、いつもの調子で  
赤の他人である俺を

温かく迎えてくれる。

漉音：「…か、環那さん、おっさん。」

大切な…話があるんだ」

玖珠：「知らねーな。独りで孤独に語っとけ」

いつもの調子で

今すぐにでも

殴りつけたい野郎1名。

渚：

「お父さん、お母さん。私からもお願いします」

玖珠：「渚？……」

お前がそこまで言うのなら聞いてやるよ」

漉音：「環那さん、

夕食に《鵜》

用意できますか？」

環那：「？、ええ

大丈夫ですよ」

玖珠：

「あー、食った食った！  
今日も環那の料理は  
最高だぜ」

環那：

「ありがとうございます」

「ごじますー！」

漉音：「……………そういえば

何で環那さんも漉も

ほとんどが

丁寧語なんだ？」

渚：「お母さんは

知りませんが、

私はお母さんの影響  
ですね」

漉音：「ふーん」

……………落ち着かない。

一応、補助的なギャグは  
すでに組み込んでるが、  
緊張しかない！

渚は俺の緊張を  
感じ取ったのか、  
手を握って小さな声で、  
大丈夫ですよ、  
と囁いた。

漉音：「ああ……  
環那さん、おっさん、  
聞いてくれ」

環那：

「とうとう発表ですか？  
私はオーケーですよ」

渚：「え、お母さんは  
私たちが

付き合ってることを  
知ってたんですか!？」

玖珠：「ブフーツ!!」

お茶を飲んでいた  
おっさんが俺の顔面  
目掛けてお茶を  
吹き出した。

漉音：「汚いだろっ！  
……って、おおっ！」

突然胸ぐらを掴まれ、  
座ってる姿勢で  
引き寄せられた。

玖珠：「おじさんなんだか  
よく聞こえなかった

「ただけど、もう一度  
言ってくれるか？」

渚：「聞こえませんか？  
でしたか？」

それならもう一度  
言うしかないです  
」

漉音：

「鵜呑みにするなよ。

(ここだっ！)

おっさん、この件、  
鵜呑みにしてくれ！

ほらっ、実際に

ここに鵜が……」

……

……あれ？

全員の動きが止まった？  
息してんのか不安に  
なるくらいに。

渚を横目で見ると

渚：「さっ」

！、視線を逸らされた。  
環那さんは

環那：

「……か、片付けて  
しまいますね」

おっさん

玖珠：「……」

何だろう、

無言のプレッシャー？

やばい、ひとまず

おっさんが事態の收拾を  
しなければ……

玖珠：「……つたよ」

漣音：「へ？」

玖珠：「渚の相手が、  
お前だよかつたよ」

漣音：「おっさん  
」

玖珠：「ふー……はー、

《如月家に、

新しい家族が

生まれたぞーっ！》  
」

**第1話・終わりの季節（後書き）**

<http://x44.peps.jp/shifia>

自分のホームページです

ゲームもありますし、  
他の小説ともリンク  
しています

## 第2話・片隅の記憶（前書き）

<http://x44.peps.jp/shifia>

サイト開いています。

ぜひみてください

## 第2話：片隅の記憶

翌日、学校への登校路

漉音：「……意外に  
受け入れてくれたな」

渚：「でも結果オーライ  
ですし、良かったです」

漉音：  
「まあ、  
そうなんだけどな」

渚：「……………」

漉音：「……………」

やばい、  
話が長続きしない…  
これで大丈夫なのか？  
誰か知ってるやつが  
通りがかってくれれば

古今：  
「由来……！  
おはようっ……！」

漉音：「いや、

お前だけは呼んでない」

古今：「登場してそうそう  
扱い酷くない!？」

僕このあと  
どうすればいいの!？」

漉音：

「ひとまず、顔こつちに  
向けたまま歩いて  
溝にはまって  
電柱にぶつかれ」

古今：「うん、わかった！

……

なんて言えるかよ！

渚ちゃんも

何か言ってくれよ」

渚：「えーと……」

漉音：「ボソツ……

じゃあ死んでください  
って言うんだ」

渚：「あ、はい……

古今さん、

では死んでください」

古今：「うわあーっ!」

泣きながら全力疾走する  
古今

渚：「…あれでよかったの  
でしょうか？」

漉音：「大丈夫だろ。  
……あれ？」

渚：「どうしましたか？」

漉音：「俺いま、  
古今の未来が  
見えた気がする」

渚：「はい？」

《片隅の記憶》

漉音：「…やっぱりな」

渚：「  
「そういわけですか」

漉音：「さつきな、  
なんか橋の向こうで  
鞆が舞い上がるのが

見えたうえに、  
ぎゃああ！

って聞こえたから  
大方予想は  
ついてたけどな。

やっぱりお前か、罹依」

罹依：「だって

いきなり目の前に

古今が現れたんだもん。  
殺るしかなかったわよ」

古今：「……ビハッ！」

渚：「古今さんが  
聞いたことのないような  
奇声を発してます」

罹依：

「オーバリアクション  
なのよ、古今がっ！」

漉音：「よし。

まあ一段落ついたところで  
、学校行くか」

罹依：「そうね」

渚：「行きましょか」

そして古今を放置。

古今：「……………もうやだ」

神崎：「……………古今さん」

通りかかった

神崎が古今を上から  
覗いていた。

古今：「そ、蘭ちゃ  
」

神崎：

「…あなたは

死ぬんですか、

死にたいんですか、

早く決めてください。

3秒以内に答えないと

私があるを殺します」

古今：「へ  
」

神崎：「3  
」

古今：「ちょ、ちよつと

待っ  
」

神崎：「2  
」

古今：「蘭ちゃん!?!  
」

神崎：「：0」

古今：「1とばされた!？」

ベキツバガゴギ

…………グチュ

神崎：

「：あなたに

下の名前で

呼ばれたくありません。

第一、

私の方が年上ですから」

俺たちは

新学期を迎えた。

夏休みもはや終わり、

また受験生に

戻ったわけだ。

……まあ、大学なんか

行く気は俺には

やっぱりないがな

朝礼前の休憩時間、

廊下を歩いていると

危険なものを見た…

知美らしき人物が

本を頭を越すくらい  
大量の前に抱えて  
階段を降りようと  
していた。

漉音：

「っておいおいおい！」

知美っ！

前見えてんのか！」

知美：「え？、あっ！！！」

ドンガラガッシャーン！

知美とおぼしき姿は  
視界から突然消えた。

漉音：「大丈夫か！

知……美？」

知美：「うん」

漉音：「……」

やばい角度にいた。

…どうしようか、

このままだと

さっきの音で

誰かが来ちまう。

しかし、

この時この角度を逃して  
、未来永劫こんな  
訪れないだろう  
俺はどうすれば

彩音：

「ん、なんだなんだ？

……と、由来君？」

漉音：「…あ、ああ」

よりによつて

テンション的

問題児が来やがった。

彩音：

「一体さっきの音は……

あー…黒か」

漉音：「じゃ、じゃあな」

彩音：「由来君？」

漉音：「…はい？」

彩音：「不潔」

俺の心の中の何かが  
壊れてきたみたいだ…  
何だろう…泣きたい。

知美：「うん」

漉音：「そうだ！

知美、大丈夫か！？」

知美：「あれ？

……私はだれ？

……ここはどこ？」

漉音：

「お前は宮間知美で、  
最強の魔術

《シタコチャネ》

を使う俺の相棒だ。

そしてここは

お前の故郷の

ドミニカだ。

思い出したか？」

彩音：

「設定に無理

ありすぎでしょ！」

知美：「そっか……

《新たな冒険》を

スタートさせたのか

納得納得！」

彩音：「わ、私が

ついていけない世界が  
広がってる〜!!」

知美：

「ってなんでやねん」

漉音：「……………」

彩音：「……………」

知美：「……………」

漉音：「知美……………」

「タイミング悪い」

知美：「そんな  
」

知美の目に涙が  
溜まってくる。

見るな！

前みたいにそんな目で  
俺を見ないでくれえ！

彩音：

「ま、

何でもいいけどさ。

知美ちゃん、

図書室か資料室に  
行かない？」

知美：「久しぶりに  
資料室に行こうかな」

彩音：

「よしじゃ決定！  
由来君またね」

知美：「漉君またね」

手を振りながら  
資料室に行く2人。

漉音：「……あれ？」

この大量の散らばった本  
誰が片付けるんだ？

……あゝ、そうか。

漉音：「見れた代償で  
俺がやんのか」

### 第3話：映る幻想

せつせと散らばった本を  
片付ける途中、  
あることを思い出した。

漉音：「資料室っていうと  
神崎だが、あいつはもう  
いないんだよな」

そう、あの文武祭の後、  
神崎はこの学校は自分の  
今いるべき場所ではない  
と言い残し、  
現在、妹である彩音の  
寮室に暮らしている。  
近くの大学に  
受かるために必死で  
勉強しているそうだ。  
時折暇ができると  
古今や俺に留年しない  
程度に勉強を  
教えてくれている。

漉音：  
「考えてみれば：  
大切な存在にもう  
なっていたんだな  
」

《映る幻想》

渚：「そういえば

神崎さんたちって

姉妹なのに性格とかが

対照的なんですね」

彩音：

「そりゃね、だって」

神崎：「大体兄弟というものはどちらかが真面目でもう片方がはっちゃけてるんです。真面目な妹想いの姉がいるからこそ世界はこんなにも安定しているんです。でなければ世界はすでに終わってます。もしそうでなければ今頃き」

彩音：

「ストップストップー！！

読者が読む気

なくすじゃん！」

神崎：「また意味のわからないことを言っただから彩音は幼稚園の頃から私に心配ばかりかけて、結局成長は見られなかったようで……これだからあな」

彩音：「お姉ちゃんは

お母さんかぁー!?!」

神崎：「ついに幻覚まで

見え始めてきましたか」

彩音：「あー言えば  
こー言うっ！！」

知美：「フフツ」

渚：「でも確かに  
神崎さんは  
良いお母さんに  
なれそうです」

神崎：  
「…そうでしょうか」

渚：「はいっ！」

賑わう10代の少女たち。  
男が入り込める  
余地がないのは  
わかっていたのだが

漉音：「…おーい」

俺は部屋の隅っこに  
突っ立っていた。

神崎：

「…おはようございます  
、由来さん」

漉音：「神崎、

単刀直入に言おう。

……何故いるんだ」

神崎：「由来さんは

そんなに私を彼女たちから遠ざけたいですか、そうですか。同年齢の友達が近くにいない私にとって渚さんや知美さんが唯一の憩いの場なのにあなたはそれを奪うつもりですか」

漉音：「さつきから

聞いてたけど、長い」

神崎：

「…言ったら負けです」

おもむろに

(ていつかわざと)

俯く神崎(19)

彩音：「あー！、

お姉ちゃんを

困らせるやつは、

例え由来君でも

許しませんよ！」

漉音：「あー、

悪かった悪かった。

すまん」

神崎：「慰謝料25万円で妥協しますよ？」

漣音：

「随分リアルな数字だな、おい。なら一生しなくていい」

まあなんやかんやで神崎もやっぱり寂しかったんだろう。ついこの前まで家族は全員死んだと勘違いしてたからな。

にしても、

彩音はあの飛行機事故で生還したことをはじめこの学校の生徒たちは知らず、

（俺が知らなかっただけかもしれない）しばらくの間姿を眩ませいた。

する必要なんて

チラッと彩音の顔を横目で見る。

その顔は笑顔で  
いっぱいだっただ。

彩音：「ん、私の顔に  
何かついてる？」

漉音：

「いや、何でもない」

彩音：「？」

神崎：「…度の日曜日は  
ちよつど暇ですね」

知美：「じゃあ一緒に  
海へ行こう」

彩音：

「お、なら

私も行く行くー!!」

神崎：「下劣な言葉を」

彩音：「下劣？

……無理やりでしょ!？」

知美：

「渚ちゃんもどう？」

渚：「あ、私は家の仕事が

あるからその日は  
無理なんです、  
ごめんなさい」

漣音：「なら、俺が  
代わりにやつとくから  
渚は海に  
行ってきていいぞ」

渚：「本当ですか！？  
ありがとうございます、  
由来君」

彩音：  
「…ねえ、何で恋人同士  
なのに、渚ちゃんはまだ  
由来君って呼ぶの？」

渚：「んー。  
馴れが必要ですからね」

彩音：「馴れね〜」

ある日の日曜日

渚：「では由来君、  
あとはよろしく  
お願いします」

漉音：

「ああ、楽しんでこい」

渚はにっこり微笑むと  
家を出て行った。

漉音：「さてと、

何しよう」

玖珠：「何しよう…」

「じゃねえよ、てめえ！」

振り返るとおっさんが  
眉を吊り上げて  
立っていた。

漉音：

「どっしたおっさん」

玖珠：「俺が折角

渚に無理言って

今日この時間を2人きり  
で過ごすつもりだった  
のにてめえは…!!」

漉音：

「あいつの願望

優先させるよ、

親だろ？」

玖珠：「ちっ…」

それ言われると何も

口答えできねえな。

……で、あいつは

どこ行っただよ？」

漉音：「聞いて

なかつたのか？」

玖珠：「ああ」

漉音：「ついに渚も

お父さん離れだな」

玖珠：「何いい！？

そんなの俺が許さねえ」

漉音：「あんたは

娘離れしろ」

玖珠：

「いつまでも俺は

お前を見守るぞ、渚」

漉音：

「知らない人が聞いたら  
ただの変態だな」

玖珠：「で、

どこ行っただよ」

あっさり流すなよ

漉音：「海だよ、  
友達3人と」

玖珠：「海か……  
海と言えば昔嫌な事故が  
起こつたな」

漉音：「事故つて？」

玖珠：「俺は実際  
その瞬間を見たわけ  
じゃねえんだけどな、  
なんでも、旅客機が  
エンジントラブルで  
墜落しちまった  
みたいだな。」

漉音：「それまさか……  
13年前か!？」

玖珠：  
「小僧知ってんのか?  
ああ、確かにあれは  
13年前に起こつた  
事故だ。」

生存者は《0》  
だつたらしい」

漉音：「え、生存者ならいたはずだろ？」

玖珠：

「どっからそんな根拠のないこと

言えんだよ。

いや、確かに

新聞やテレビじゃ

はじめは噂されたがよ、

結局遺体は

見つかったそうだ。

全旅行者のな」

漉音：「……………」

嘘だろ？

だって彩音は実際

生きているし、

何より一緒に話したり

してるじゃないか。

漉音：「……………彩音」

玖珠：「彩音？

……………てめえまさか

渚以外に女を！！」

漉音：「違う！

その飛行機事故で  
生存した俺の友達だ」

玖珠：「あ？

だから生存者は」

漣音：「…神崎彩音って  
いうんだ」

その名を聞いた途端、  
おっさんの顔が驚きに  
変わった。

玖珠：「神崎だと!?

神崎つつたら

あの金持ちの豪邸持ち  
じゃねえか」

漣音：「有名なのか？」

玖珠：「てめえも

登校する途中の道で

見かけるだろ」

漣音：「いや、あんまし  
見てねえからな」

玖珠：「はー。

だから世間知らずは……  
あそこは有名な学者が

住んでたみてえでな。  
なんでも、その長女は  
頭がきれたやつだったが  
家族旅行の日に偶然  
風邪をこじらしちまった  
みたいで、旅行には  
行けなかったそうだ」

漣音：「…その後は？」

玖珠：

「引きこもつち  
まったらしい」

漣音：「そうか」

#### 第4話：空白の彼方へ（前書き）

評価、感想など！  
送ってもらえると  
投稿までの間が  
小さくできると  
思いますから、  
よかったですら  
送ってくださいね

## 第4話：空白の彼方へ

引きこもった…

つまり

それは神崎のことで、  
生存者は0らしい

なら彩音はなんだ。  
話が食い違ってる。  
矛盾、してる

玖珠：「おいおい、  
どうしたどうした小僧。  
深刻そうな顔して…  
……まさか、  
お前本当に渚以」

漣音：「違う！  
と、とにかく俺は  
あいつらのところに  
行ってくる」

玖珠：「な、  
ちよつと待て小僧！  
お前1人だけ行く気」

しかしすでに漣音は  
店を出て駅へ  
走っていた。

玖珠：「お、おお、俺もーっ

連れてつてくれーっ!!」

誰もいない店の入り口に  
向かって叫ぶ大人……と

環那：「玖珠さん？

どうしたんですか、  
そんなに叫んで？」

玖珠：「環那……」

環那：

「また前みたいに  
店を勝手に空けないで  
くださいね？」

笑み。

《まるで》、

裏表がないかのような

玖珠：「……はい」

この時に限って2人の  
立場は入れ替わって  
しまうという

悲しい事実を

受け入れなければ

ならない玖珠だった

《空白の彼方へ》

ガタンゴトン

ガタンゴトン……

神崎：

「……そろそろですね」

彩音：「今から行く

《空海》（からうみ）

ってどんな場所？」

ピクツと、知美が

その言葉に反応した

ように解説をはじめた。

知美：「うーんと……

《この地域一帯には

渡り鳥の行き交う

社交場があり、他にも

アサリなどが採れたり

、まさに自然と

共生している有名な

場所の1つである。

夏は毎年海水浴で

賑わいを見せ、  
ダイバー体験をすること  
もできる」だって」

彩音：「だって、って  
そんな棒読みで  
ガイドブック見ながら  
言われても」

知美：「ううん。  
今のは昔に見たやつを  
思い出して言っただけ」

彩音：「すごっ！！  
……じゃなかった、  
文字だけじゃ状況  
分からないじゃん！」

神崎：  
「…それはNGワードです  
馬鹿が」

彩音：「実の妹に対して  
いきなり  
《馬鹿が》、は  
ないでしょ！？  
ちゃんといいツッコミ  
入れたはずなのに」

神崎：「…ボケ倒せない

ならそれまでです」

彩音：

「あー言えば

こー言うっ！」

神崎：

「それ昔使いました」

彩音：「あーっ！っ！」

髪をくしゃくしゃに  
しながら

「こいつには優しさ  
というものが

ないのかーっ！っ！」と  
でも言いたげに  
叫んでいる。

渚：「彩音ちゃん  
落ち着いて落ち着いて」

優しく言われたからか  
彩音の荒れていた精神が  
正気に戻っていく。

渚：「深呼吸〜深呼吸」

彩音：「ふー、ふー…  
ありがとう渚ちゃん。

ふー、ふー、

F a l l m e A Y A N E ! !

H u r r y u p , h u r r y u p ! ! !

いきなり電車の中で

オーバーアクション

しながら騒ぎ出す彩音。

注) 結構満員です。

渚：「凄い覇気です!!」

神崎：「：思いつきり

意味捉え間違い

してますが」

知美：

「意味どころか

文法から違うよ」

彩音：「頭が良い奴なんて

大っ嫌いだー!!」

20分程たって

彩音：

「着いた！海だ！

白浜だー!!」

意気揚々と跳ねながら  
はしゃいでいる。

神崎：「…宮間さん、

あの準備は

順調ですか？」

知美：「そろそろかな？」

渚：「？」

プルルツ、プルルツ！

勢いよく知美の携帯が

鳴ったかと思うと、

待っていたかのように

通話ボタンを押す。

知美：

「もしもし……」

はい…はい、

じゃあそれで

お願いします。では「

神崎：

「大丈夫みたいですね」

彩音：「あのさあ、

さっきから何の密談？」

知美：「ダイバー体験」

渚：

「ダイバー……って

あのですか？」

神崎：

「タイ（の）バーではないですよ？」

彩音：

「ワカッテマスヨ

バ」

神崎：「阿呆が」

彩音：「最後まで

言わせてよ」（泣）」

一行が到着してから、  
すでに日は真上にまで  
来ていた。

彩音：

「……ささっ、

準備も整ったし！」

水着を着て

先頭に出た彩音が

振り向きながら

大きく手を挙げて…

渚：「まずは昼食」

知美：「はじめは本を」

神崎：「しばらく休憩」

彩音：「……………」

渚 & a m p ; 知美 & a m p ; 神崎：  
「……………」

彩音：「……………体験は？」

知美：「2時間後だよ？」

彩音：「……………はあ」

かなり気落ちする彩音。  
するとそこに、  
聞き慣れた声と  
男の姿が現れた。

？：「彩音！」

彩音：

「！、由来く」

爽やかに走ってくる、

その正体は

古今：「おーっ！っ！っ！」

彩音：「あんたかいつ！！」

現れた瞬間

反射的（故意）に

顔を殴られて

砂埃をあげながら

宙を舞う古今。

漉音：「：ん？

すまん、勝手に

ついてきたんだそいつ」

渚：「由来君？」

漉音：「ああ、

ちよつと知りたい

ことがあつてな、

来ちまった」

神崎：

「：知りたいこと…

：ですか？」

砂浜に張っていた

パラソルから出てくる。

漉音：「…彩音、  
大事な話がある」

彩音：「へ？  
私に用なの？」

神崎：「…そういうの、  
目の前でやられるの  
好ましくないのですが」

渚：「？」

漉音：「勘違いするなよ？  
…単刀直入に言う。

彩音、本当にお前は  
あの事故で生」

徐々に彩音の眼が  
見開かれたようになり、

彩音：「あのさ！」

突然大声を出して、  
会話を中断する。

漉音：「なっ！  
どうした急に」

彩音：「え、えーと……  
そ、そうそう！」

ダイバー体験を今から  
するんだよ。

由来君も行こ？」

漣音：「まだ話しは  
」

渚：「あとでもいい  
じゃないですか、  
由来君」

知美：「何事にも  
ゆとりが大切だよ」

漣音：「……じゃ、  
じゃああとでな」

彩音：「はいはい」

そして一同は  
体験ができるという  
施設に向かった。

神崎：「……まさか。  
……いや、それは  
ないですよね」

## 第5話：深海の聖地

~~~~~  
「ねえ。  
あなたは  
いったいだれなの？  
わたしとおんなじ  
うごきをするあなたは  
~~~~~

### 《深海の聖地》

漣音：

「……崎！」

目を開ける、神崎！」

何度も声をかけた末、  
その体は少しだけ  
ビクついた。

神崎：

「……はい？」

どうか、しましたか？」

目を開けると目の前には  
逆光のせいで  
よくは見えなかったが、

3つの陰があった。

横たわっている体を  
砂浜から起こし、  
反射的に背中についた  
砂をはたき落とす。

漉音：

「どうしたじゃないだろ  
それは俺の台詞だ」

神崎：「？」

いまいち状況が  
読み込めてないらしい。

渚：「蘭さんは歩いてたら  
突然倒れたんですよ」

彩音：

「お姉ちゃん……  
ホントに、  
ホントに心配  
したんだからね!!」

少し涙目になりながら  
強く抱きしめる。

神崎：

「……彩音 ごめんね」

ゆっくりと、  
手を頭に回して体に  
引き寄せていく。

知美：「感動モノ」

彩音：

「じゃあ

気を取り直して〜えっ！

バイビバア〜

（ダイブだあ〜）」

バツシャーン！！

勢いよく

海に潜っていく。

担当者の説明も聞かずに

担当者：

「ちょ、ちよつとー!?!?」

神崎：「すみません。

ああいう子なんです」

担当者：

「はあ……」

では、皆さんも海に

ゆっくり潜りましょう」

渚：

「楽しみです…」

ブボツ（おおおっ）！！」

漉音：

「！！……」

（おおっ！！確かにこいつはすげえな）」

一面に広がる

色とりどりの魚たち。

その中で魚と戯れていた  
彩音に戻ってこいと

合図を送る。

合図はもちろん

ジェスチャーのみ。

彩音：

「（知美ちゃん、

向こうに行こうよ）」

指で果てしない深海の  
彼方の方を指差す。

知美：

「（うん、行く）」

小さく頷く。

漉音：

「（渚、俺たちも  
向こうに行こうぜ）」

渚：「（はい！）」

にっこりと微笑む。

その時、俺の肩に  
誰かの手がのせられる。

予想も何も、  
残っているのは  
神崎とあいつなわけ  
だから振り向かなくても  
察しはついていたが  
振り向いてみる。

古今：「……………（泣）」

ひたすら俺に何かを  
伝えたいようだ。

なんだ？

クラゲアイスでも  
お前は食べたいのかよ？

漉音：「……………」

いや、俺この状況で

どうやってお前に  
ツッコメばいいんだよ！

古今：「（泣）！！」

何て捉えたのかは  
定かではなかったが、  
古今は大泣き（多分）を  
しながら浮上していく。

彩音：「（おお〜！）」

青く透き通った目は、  
とても輝いていた。

神崎：

「…美しさが  
伝わってきます」

神崎もまた、

その光景に濃青の目を  
輝かせていた。

海底に残る謎の残骸。  
その周りを取り囲む  
ようにして、様々な  
深海魚が優美に  
動きまわっていた。

彩音：

「んっん！」

（この中に

入ってみようよ）」

神崎：「……………」

胸の前で腕をクロスする  
拒否しているみたいだ。

彩音：「んんー！！！」

頬を膨らませ、  
駄々をこねる。

神崎：「……………」

しかし、神崎の腕は  
依然にクロスだ。

彩音：「ふんっ！！！」

神崎：「！！！」

姉の忠告を振り払って  
謎の残骸に泳いでいく。

漉音：

「（俺たちも

追いかけるぞ）」

肘の曲げ伸ばしを  
繰り返して、行くぞと  
渚と神崎に合図を送る。

2人も頷いて、  
謎の残骸に泳いでむかう  
こととなった。

彩音：

「（つつたく。  
なんだよなんだよ、  
拒否ってさー）」

依然に機嫌を斜めに  
しながら中を搜索する。

しばらくすると、  
暗い通路の一角から  
微かに差し込む光が。

彩音：

「（おっ！  
冒険らしく  
なってきたねえ）」

漉音：

「（どこにいったんだ  
彩音のやつは）」

まったくの他人である  
俺がここまで  
心配してるんだ。  
きつと後ろの神崎は  
それ以上に心配してるに  
違いない。

神崎：「（……）」

彩音：「ここは」

空気のある部屋。  
隅には大量の酸素ボンベ  
が転がっていた。

彩音：

「まあこっちの方が  
快適だし、しばらく  
ここにいとくかなあ」

渚：「（はあ…はあ…）」

渚の顔色が悪い。  
確認してみると、  
酸素の残量が  
残り少なかった。

漣音：

「（一度

上にあがるう」

そうして

俺はもと来た道を

戻ろうとした。

が、神崎の細い腕が

俺の腕をがちり捉え、

首を横に振っている。

早くしないと渚が

死ぬかもしれないって

いうのに！

すると神崎は壁に

文字を指で書きだした。

俺は何て書こうと

したいのかを必死に

読み取るうとする。

|| || || || || || || || || ||

いまあかると、

肺があつぱく

さわて、死にます。

-----  
-----

大体意味はわかった。



第5話：深海の聖地（後書き）

話の中に出てきた

《肺が圧迫されて死ぬ》

つていうのは、

人間とかが深海に

潜ったあと、

肺が水圧で圧迫されて

海からあがるときに

押し潰れてしまう

らしいです。

定かではありませんが…

第6話・彩り遷る海音（前書き）

<http://x44.peps.jp/shifia>

サイト開いています。

ぜひみてください

第6話・彩り還る海音

~~~~~  
だれって？

そんなのきまつてるよ。

わたしはあなた。

そしてあなたもわたし。

いつまでも

いっしょだからね。

……おねえちゃん。

~~~~~

《彩り還る海音》

縦横無尽に広がる通路を  
片っ端から確認する。

効率よく探すなんて

俺1人では無理だ。

だから

つんつん。

後ろから肩をつつかれる  
振り返ると知美がいた。

漣音：

「(知美！  
お前は渚と一緒にいる  
って言ったる?)」

知美：

「(漉君だけじゃ  
大変そうだったから…  
大丈夫。  
渚ちゃんには  
蘭ちゃんがいるから)」

双方言葉にはできないが  
相手が何を  
言いたいのかが  
何故か読み取れた感じだ  
こんなのをたしか

知美：

「(以心伝心だよ)」  
そうそうそれそれ…  
って！

知美にまで  
心を読まれた！？  
というか  
俺も読み取れた！？

知美：

「(…遊んでないで  
早く探さなくても

いいの?)」

!

すっかり忘れてた。

漣音：

「(じゃあ知美。

俺は右に行くから

お前は )」

目の前に何かある。

動きが止まる。

知美：

「( ?

どうしたの漣：君?)」

目の前に何かあった。

知美も動きが止まる。

2人は同じものを見て

同じように止まっていた

神崎：「…遅いですね」

彼らが

出発してから早10分。

渚さんのボンベは

ほとんど底をつき、

私のボンベを共用して

使っていますが、  
このままでは私の分も

酸欠で意識が朦朧と  
しかかっていたその時、  
遠くから光が見えた。  
しかも点滅している。

神崎：

「（…やっとですか）」

神崎：「……………」

神崎がひとり立ち尽くす  
その目線の先には彩音が

漉音：

「助かった彩音。

あそこで手を伸ばして  
くれなかったら、

俺たち死んでたかも  
しれない」

その言葉に続いて  
知美も感想を述べる。

知美：

「でもいきなり

黒いゴム手袋

みたいなのが現れたから  
ちよつと

「驚いちゃったよ」

彩音：「酷っ！！

人がせつかく

助けてあげたのに、

その手を

ゴム手袋って!？」

神崎：「……彩音」

彩音はこの時

感じたのだろう。

後ろからくる

黒いオーラ。

満ち溢れる殺気。

なんか今までに

感じたことのないような

鋭く尖った視線…

水で濡れてて

分からないはずなのに、

彩音の首筋から冷や汗が

垂れているように見える

彩音：「お、お姉ちゃ」

パシッ！

振り向いた途端、

神崎のビンタが

彩音の頬を赤くする。

彩音：「痛っ……」

な、なにすんのよ

お姉ちゃん！！」

神崎：

「彩音：あなたが

私たちにどれだけ

心配かけたか

わかってますか？」

彩音：「う」

神崎：

「彩音を、もし、

失うようなことが…

あれば

言葉が

途切れ途切れになる。

その頬を伝うは

いくつもの軌跡。

彩音：「お姉ちゃん、

「ごめんなさい」

知美：「……………」

神崎：「…………許しません」

渚：「……………」

彩音：

「…………ごめんなさい…！」

神崎：「…………許しません」

漉音：「……………」

彩音：「……………」

神崎：

「…ただ、

許してもらいたいなら、

これからは、私から

離れないでくださいね」

彩音：

「…っ、え？

その、それはつまり」

神崎：

「…一緒にいようね、

彩音。

私たちは換えることのできないたったひとつの姉妹なんですから」

彩音の頬にも  
神崎のような  
軌跡が伝わる。

彩音：「…うん。  
……ごめんなさい」

神崎：  
「…はい、許します」

船乗り：  
「小僧！  
なかなか見所のある  
腰構えじゃねえか」

古今：  
「えへ。そうですか  
いやー、たまたまですよ  
た・ま・た・ま！」

古今は船乗りの褒め言葉にまんまとのせられ  
浮かれていく。

漣音たちが  
ダイバー体験を

している間

古今は、

《挑戦！！》

君も大海原へ行こう！  
に参加していた。

船乗り：

「小僧！

何か網に引っかかっている  
みてえだぞ」

古今：「え？

あ、ホントだ。

よおーし！！男古今朱雀！  
由来たちに目にももの  
入れてやるうー！！」

船乗り：

「入れたら

殺人事件だぞ小僧」

古今：「うおおおっ！！  
す、すごい重さだ。  
今までにないくらい」

船乗り：

「（そんなすげえの  
この海にいたっけ？）」

古今：

「もう少しいい…  
もう少しいい……………  
うおりゃあー！！！」

古今が網で  
引き揚げたのは  
体長1mは軽く超す

漉音：「よっ、久しぶり」

釣れたのは魚…  
じゃなくて友人。

船乗り& a m p・古今：  
「んな……………  
（口を  
あんぐりと開ける）」

感覚的にはこうだろう。  
ラブレターを好きな子の  
靴箱に入れ、意気揚々と  
していると、目の前に  
現れたのはよく遊ぶ友人  
そう、入れる箱を  
間違えたのだ！  
だがそこで話が  
終わればよかった。

実はその友人は  
ホモやらゲイやらで、

「ありがとな、。  
俺もお前を大切にする」  
とか堂々と集団の中で  
宣言されるようなものだ

渚：

「ふー。

あれ、何で古今君が？」

古今：「渚ちゃんが  
海から現れるなんて……  
これはまさに女神と  
グヘフルハアー！！」

古今が船から  
落とされる。神崎に。

神崎：

「ふざけている  
場合じゃないんです。  
彩音！？…彩音！？  
目を…開けて」

そう、彩音は突如意識を  
海底で失っていた。

船が180度

回転して岸を指す。  
エンジンは全開。

船乗りも必死だった。  
俺も…神崎も

神崎：

「彩音！

ま、またこんな心配を  
か、かけさせて…

許しません…よ」

神崎の声が震えていた。

13年前の悲劇。

それは神崎からすべてを  
奪った…はずだった。

その後2人は思わぬ形で  
再会し、今日まで

楽しく暮らしてきた。

《唯一の家族》

でもそれがまた、  
引き離されようと

していた。

ブルル……ガクン！

船乗り：

「岸についたぞ！

小僧たち早く嬢ちゃんを  
湾岸病院に連れてけ」

漣音：

「ああ！」

…神崎、少しの間  
手を離してくれ」

神崎：

「…私も、行きます」

漉音：

「ん…なら早く行くぞ」

病院

彩音は緊急治療室に

入れられ、呼吸も

おぼつかない状況だった

日は暮れ、渚や知美は

遅くなるといけないから

先に帰らせた。

古今はひとまず

ジュースの買い出しで。

俺は神崎とつきつきりで

彩音の寝顔を見ていた。

でもそれがいつか

遠い記憶のように

看護師：

「…え、先生！」

患者さんが!!」

ドクター：

「どうしたんだ!」

看護師：

「…い、いないんです」

神崎：「……は!」

その言葉に反応してか  
隣で寝ていた神崎が  
突然目を覚ます。

神崎：「あ、彩音」

漉音：

「ん、ん……」

つておい、どこに!」

神崎：「海岸です」

漉音：

「その根拠のない自信は  
どこからくんだよ?」

神崎：

「たったひとりの  
妹の姉ですから。  
お見通しなんです」

「はっ、はっ、はっ……」

海岸までは走って2分。  
俺は神崎の海岸という  
ヒントしか知らない。  
しかし神崎は正確に  
浜辺を走っていた。

そこに、  
大きな光が眼に映る。  
灯台だった。

しかもそこに映った影は  
紛れもなく  
彩音のものだった。

でも薄い。薄すぎる。  
その影は光に  
照らされながらも、  
黒くなく、  
光に侵されている。

漣音：「あ、彩音っ！」

俺の言葉では  
振り向いては  
くれなかった。

神崎：

「…彩音！」

はじめは  
振り向く素振りも  
見せなかったが、  
少しだけ振り向いた  
ようだった。

彩音：「……いこ」

波の音でうまく  
聞き取れなかった。

神崎：「……」

彩音：

「……これで、最期…」

ここは、空海…

私の…からだ」

な、何を言っているんだ

漣音：

「…い、意味が

わかんねえよ。

ここが、何なんだ？」

神崎：

「空海…」

13年前の…悲劇です」

間髪入れず答える。  
しかしその表情は暗く、  
答えたあとは無言と  
なってしまった。

漉音：

「彩音：

お前は何をする気だ」

彩音：「簡単な話だよ。  
元の場所にもどる」

神崎：

「っ！

だ、駄目です。  
逝かせません」

漉音：

「逝く…ってまさか！…！」

彩音：

「はは…違っ違っ。  
海なんかには帰らない」

お前は笑って言うけど  
問題は深刻なんだぞ

彩音：

「私かもどるのは…！」

ゆっくりと

神崎の方に歩き出す。  
そして指差したのは…

神崎：「私の…影？」

彩音はこくりと頷き、

彩音：

「だつてさ、海なんて  
ただ寒いし暗いし、  
いやだな〜って思つて  
なら、由来君や  
渚ちゃん、お姉ちゃん  
とかと一緒にいた方が  
楽しいかな〜って」

漉音：

「…待て彩音。  
そもそも何でお前が  
神崎のところへ  
戻んねえと駄目なんだ？  
別に今のままでだつ」

彩音の顔が突然沈む。  
しかし直ぐに立ち直つて

彩音：

「ごめん。」

私もう、2回ね、  
死んじゃったんだよ」

神崎：「…死んだ」

彩音：

「そう死んだ。

1回目は飛行機事故で。

2回目はさつき、

酸素が尽きちゃって」

漉音：

「な……

くつ、何で酸素が

ないってことを

俺に言わなかった！」

彩音：

「だってそしたら

由来君が傷つくんだよ!？」

そんなの」

漉音：

「それがどうした!！」

彩音の体がビクッと

震える。

漉音：

「俺が傷つくくらい、

お前が死ぬより

全然ましなんだよ!!

死んだら…

元も子もねえんだよ!!」

彩音：「うー、ごめん」

……

しばらくの沈黙。

それを破ったのは

彩音だった。

彩音：「お、お姉ちゃん…

私は何で今の今まで

生きてこれたと思う?」

神崎：「それは」

神崎でも答えは

わからないようだ。

答えられないとわかると

彩音は少し微笑み、

彩音：

「お姉ちゃんに会いたい

お姉ちゃんと

一緒にいたいと

思ったからだよ」

神崎：「……………」

彩音：

「だから……………」

《さよなら、

蘭お姉ちゃん》「

神崎：「つ……………」

現実じゃありえない。

彩音の、体が薄く…

そして神崎の影が濃く…

神崎：「……………つは」

大きく小刻みに

深呼吸をする神崎。

もしかしたら今目の前で

起こったことを

見ていないかもしれない

神崎：

「……………由来さん…

……………彩音は？」

漉音：「っ！」

何て答えりゃいいんだ

神崎：「…ですよね。  
言えませんよね。  
頭の中では  
わかっているんですよ、  
本当は」

漣音：「神崎」

さつきまで  
ここにいたのは3人。  
でも今は2人だけだ。

神崎：

「…彩音。  
また皆さんと  
お話したかったら  
出てきていいんですよ」

《空海。》

それは海に沈んだ魂が  
集まる場所。

肉体がない、それ故に  
こう命名された。

13年前に起きた  
飛行機事故で、最後に  
発見された少女は、  
意識はあつたがのちに  
植物状態となり、  
その肉体は事故から

13年後に火葬された》

ミンミンミンミンミン

漉音：「……暑いなあ」

漉音は誰かの仏壇の前で  
話しかけるように、  
そう呟いた……

第6話・彩り還る海音（後書き）

彩音ね。

何でこんな話になっちゃったのか…

まあ、いつか由来たちも  
悲しい別れが訪れるの  
でしょうね。

本当に、身近なところで

次は《彼》がついに  
戻ってきます。  
ついでに海から  
《付属物》も。

## 第7話：君と紡ぐ世界

罹依：「今日ね！」

漣音：「いや、何がだよ」

### 《君と紡ぐ世界》

今俺は、

部員が各々の事情で

部室に来られない

ということだったが、

特に行くあてもなかった

から部室に来ていた。

すると、

どこからともなく

まるでずっと監視でも

していたのかのように

罹依が部屋に続いて

入ってきた。

途端これだ…

意味がわからん。

罹依：

「何がじゃないでしょ。

雲英君よ、雲・英！」

漣音：「ん、もうそんな  
退院の頃だったか」

罹依：「あんたね、  
部員仲間のことくらい  
覚えときなさいよ」

漣音：  
「わかったわかった…  
じゃあ雲英を出迎える  
準備でもするか？」

罹依：「しない！」  
きっぱり拒否した！  
仲間って  
言ったの誰だよ！

罹依：  
「行くのよ、今から」

漣音：「…へ？」

漣音：  
「夏も  
終わりだというのに  
何故お前はそんなに  
元気なんだ太陽。」

でもきつとお前だって  
罹依に付き合ったら  
元気じゃなくなる。  
そんな自信が  
俺にはある！！」

罹依：「黙れ！」

グーで殴られた

罹依：

「何よその

誰に言ってるのかも

どう答えたらいいのかも

意味不明な文章は！」

漣音：

「暑さで壊れそうな上に

お前のせいで精神崩壊

しそうなん」

∴グーで殴られました。

罹依：

「ふう………ねえ」

漣音：「あ？」

罹依：

「あんた……」

渚とつまくやってる?」

漉音：「なっ!!」

何でそんな話に

いきなり持つて行く!?

漉音：「…ま、まあな」

まず平静を保とう…

そうすればこんなの

罹依：「キスは?」

漉音：「なっっ!!」

直球すぎるだろ!!

一体どうしたんだよ!?

漉音：

「…ま、まだだが?」

罹依：「ふーん…そう」

簡単に納得するなあ!

お前は何がしたい!!

罹依：「あ、着いたわよ」

しばらく無言だった

罹依が喋りだす。

こいつの無言ほど  
耐えられないものはない

そして病院の

涼しい冷気に当たる。

これをどれほど

待ち望んだか。

罹依の姿がいつの間にか  
見えなかったから、  
捜したくはなかったが  
後々面倒に

なりそうなので捜すと、  
罹依はナースさんに  
雲英の室番号を  
聞いているところだった

つくづくテレビを  
見ていて思うのだが、  
本当にナースさんは  
室番号など  
覚えているのだろうか。  
あとで罹依にでも  
聞いてみるとしよう。

罹依：

「5階の502号室よ。  
早く行きましょ」

罹依：「雲英君いるー？」

病室の扉開けて

大声で言うなよ。

その爺さん

びっくりして喉

詰まらしちまっ たらうが

仙里：「ZZZZ」

罹依：「あ、寝てたか」

漣音：

「…叩き起こすなよ？」

罹依：

「しないわよ！

…まあいいわ。

ちよっとお見舞いの品を

そこまで買ってくるわ」

そう言つと罹依は

速歩きで病室を出て行く

漣音：

「……仙里、

起きてんだろ？」

仙里の体は

すっと起き上がり、  
眼がゆっくり開く。

仙里：

「バレましたか。  
流石は由来さんです」

漉音：

「ああ。  
今日退院なんだってな」

仙里：

「はい、おかげさまで」

変わらない…  
事故前と態度も。  
でも…

漉音：

「仙里、お前もう  
あの能力使えないよな」

仙里：「……」

黙ってしまった。  
凶星みたいだな。

仙里：

「…はい。  
いえ、元々あれは」

僕自身に使う予定は  
さらさらなかった  
ですから」

漣音：「そうか…」

仙里の能力。

正確には能力じゃなくて  
あいつが持つてる  
袋の中にある《何か》。

それは仙里いわく、  
《願いが叶う》もので、  
あいつは罹依のために  
使った。

《いつまでも一緒に》と

罹依：「漣ー？

あんたソーダで…っつて

あんた雲英君を

叩き起こしたわね!？」

漣音：

「あ？

違う、こいつはっ…!」

ドガ…!」

仙里：

「すみません罹依さん。  
わざわざ  
来ていただいて」

罹依：

「構わない構わない（笑）  
雲英君が元気なら  
問題ないわ」

俺には問題  
大ありだけどな。

仙里：

「……2回目ですね」

罹依：「え？」

仙里：

「昔にも僕は罹依さんに  
病院にお見舞いに  
来てもらったことが  
あるんですよ。  
やっぱり……  
覚えてませんか？」

罹依：「あー」

記憶をひねり出すように  
頭をフル回転させる。

だが多分

思い出せないはずだ。

罹依の

欠けた記憶だからな。

現に前にも仙里は

同じ質問をしたが

知らない、と

あいつは答えた。

罹依：「…っ！！」

漉音：

「っ！どうした罹依！」

頭を抱えて

しゃがみ込む。

しだいに

息も荒くなつて

仙里：

「ナ、

ナースコールを……！」

罹依が仙里の腕を掴み、

ゆっくりと立ち上がる。

罹依：

「っ……大丈夫だから…

大丈夫……」

仙里：「罹依：さん？」

心配そうに罹依を  
じっと見つめる。

その時、

罹依の口が開いた。

罹依：「思い……た」

漉音：

「？……まさか！」

罹依：「思い……出した」

第8話：消え去った心（前書き）

今回は

ちよつとつまらない

かもしれません。

多分読まなくても

後々さしあたり

大丈夫だとは思いますが

読んでほしい

ところです、はい。

第8話：消え去った心

~~~~~  
あんなつのひ…  
そこではくはであった。  
きれいなはなをもった  
かのじよを  
~~~~~

《消え去った心》

仙里：

「本当に…記憶が？」

罹依：「……うん」

罹依は記憶が戻った  
というのに、いつになく  
暗い表情をしていた。

仙里：

「なら…」

わかりますよね」

罹依：

「……信じられない」

仙里：

「それが

当然の反応ですよ。

誰だってそう」

穉依：「……………」

本当なら話から

察しれたらいいだけだが

駄目だ、わからない。

漉音：

「仙里、お前は

何を言おうとしてんだ」

この発言で

周囲を沈黙が包む

仙里：

「…簡単なこと

なんですよ。

そう、僕は……………本来、

死んでいるんです」

漉音：「死んで……………いる？」

仙里：

「同じような事例を

知りませんか？」

漉音：

「まさか、彩音か！」

仙里：「(にこっ)」

仙里はただ

微笑んただけだった。

それが

何を意味してるのか

なんてわかりきってる。

仙里：「これを」

渡されたのは

カセットテープだった。

仙里：

「その中には

僕の声の録音があります

それを宮間さんか

神崎さんにでも

お渡しください」

漉音：

「お前神崎のこと  
知ってたか？」

仙里：

「上からですよ、

上から」

指が天井を指す。  
もちろん指しているのは  
天井じゃないと  
頭ではわかっているが

仙里：

「少し高度な説明を  
そのカセットには  
入れてます。

残念ながらそれは  
由來君や罹依さんでは  
多分理解できません。  
ですから宮間さんか  
神崎さんに　　！！」

俺と罹依は一歩進み、  
仙里のすぐ  
目の前にまで来ていた。

罹依：

「知美や蘭經由は駄目よ  
難しくても私は雲英、  
あんたから直接聞く」

漉音：「俺もだ仙里。

確かに俺たちじゃ

お前の説明を

理解することはできない

かもしれないが、  
俺たちはお前の口から  
聞きたいんだ」

仙里：

「……わかりました。  
なら、僕の口から  
話しましょう」

仙里：

「しばらくは  
僕に一方的に  
喋らせてくださいね。」

…僕が罹依さんに  
初めて会ったのは…

…11年前ですね。  
この町の小さな病院。  
つまりここです。

僕は白血病で  
ここに入院してて、  
罹依さんは妹さんの  
結依さんがこの時  
この病院に

短い間でしたが  
入院していたから  
お見舞いに来たときです

たまたま、

僕は病院の庭で

羅依さんに出会い、

羅依さんは僕のこと

心配して結依さんの

ついでに僕の見舞いにも

来てくれたんです。

でも僕は病の急性で……

死んで、しまいました。

本来ならこれで話は

終わりなのですが、

僕はなんでか

殆どの記憶を失っては

いましたが、また生きて

この町に立ったんです。

理由も、原因も、

僕でさえ

わかりませんでした。

もちろん今も」

羅依：「& a m p ; 漣音」……」

仙里：

「あ、も、もちろん

普通はありえませんが！

でも本当に

そうなんですから！」

羅依：

「え、えーとね……」

要は雲英は何が  
言いたいわけ？」

こいついきなり  
話のオチ聞き出した！！

仙里：

「要は…ですか？」

罹依：「うん、要」

駄目だこいつ。  
もうオチしか興味ねえな

仙里：

「…これは

僕の考察なんです、  
死んだ人には  
まだ強い思い…

つまり未練があつて、  
生きてる人も

まだその人に  
未練があつたとき、

何らかの…

どうわかりやすく  
説明したら

いいんでしょう…

…つまり、世界は、  
この世とあの世。

それと、もうひとつ

漉音：

「もうひとつ？  
中間の世か？」

仙里：

「いえいえ。

それは僕の中では  
世ではないと思います。  
未知の次元で創られた、  
もうひとつの世界。  
おそらく人ならざる人が  
いるんでしょうね」

罹依：「????」

目線が固定してない。  
明らかに頭が  
こんがらがってるな、  
あれ。

仙里：

「と、とにかく！  
僕が言えるのは  
ここまです。

…そしたら、  
部室に戻りましょうか」

漉音：

「…そうだな。」

今深く考えても  
答えは出なさそうだし、  
帰るか」

罹依：

「そうね、  
雲英君も一緒に！」

？：

「…時の歩みを  
止めてはいけない。  
例えそれが本当は  
間違つてるとしても  
」

謎の者は下を見下ろす。  
そこには小さな少女が  
眠っているように  
横になっている。

？：

「君の運命は、  
どう流転するかな？」

…《由来》「

## 第9話：遠い刹那

校長：

「……という  
わけですね」

いつもの無駄に

長い話も終盤を向かえ、  
皆がざわめきだした頃、

マイクがガタンツと  
軽く音を立て、

校長の足が奥に行く。

代わりに

短い靴下を履いた

下級生の

女子の足に変わる。

見上げようと

上を見た途端、

それはすでに遅かった。

河南：

「まだ朝礼は

終わってないぞ!!

みんな最後まで

話を聞いてくれっ!!」

耳慣れしない大音量が  
体育館中に響き渡る。

もちろん俺は  
一瞬の勘を信じて  
耳を塞いだが、  
隣りにいた古今は  
潰れていた。

《遠い刹那》

人混みの中にいた  
河南を見つけ出し、  
「よっ」と声をかけ  
話をし始める。

渡音：

「今日も  
名演説だったな。  
全員がお前に  
耳を傾けてたぞ」

河南：

「やめてくれ。  
あんなのただ  
一喝しただけだ」

河南はこつちを  
振り向きもせず、  
ただ、軽く溜め息を  
つくばかりだった。

河南：

「…ん、いや、

心配しないでくれ。

何でもないんだ

本当に、何でも」

一瞬のうちに

河南が膝を折り、

廊下にしゃがみこむ。

漉音：

「お、おい！

河南、大丈夫か？」

河南：

「し、心配…するなと」

漉音：

「もう喋るな。

保健室行くぞ」

河南：

「お前にそんな心配…

かけられる筋合いは」

漉音：

「意地張るなよ。

ほら、連れてってやる」

河南を

背中におんぶして、

俺は急いで

廊下を走り出した。

放課後、保健室

先生からの呼び出しで

保健室に行くと、

静かに寝息をたてながら

眠っていた河南がいた。

幾つもの包帯を巻いて。

漉音：「河南　？」

先生：

「由来君、

彼女は私には一切

何も話してくれないの。

そんなときこの子が

小さく由来って呟いて…

ちよつと起きるまで

ここにいて、

事情を聞いて

くれないかしら」

漉音：

「……………」

先生：「…よろしくね」

先生が考慮してくれか、  
席を外す。

漣音：

「…つたく、

どうして生徒会長さんが

こんな包帯

まみれなんだよ」

届かない独り言。

いや、聞いてない方が

いいから俺はこんなこと

言ったのか

河南：「……由来か？」

一瞬飛び退きそうになる

誰だって

死んでるはずの人が

いきなり起き上がったら

驚くのと一緒だ。

漣音：

「目…覚ましたか、

河南？」

河南：「まあ……な」

ひとまず、渚の家に  
連れて行くことにした。  
あそこに行けば  
河南も元気になって  
くれるだろうからな。

環那：

「河南さん、  
遠慮せずに  
くつろいでくださいね」

河南：「ど、どうも」

玖珠：

「生徒会長たあ、  
すげえじゃねえか」

河南：

「そんな大層な  
ものでは」

完全におされてた。  
なんかまずいな

渚：

「お鍋が出来ました」

渚が鍋を  
にこにこしながら

持つてくる。

この一家にとつて、  
来客は嬉しい限りだ。

しかも環那さんと

おっさんにとつては

娘の友達が

遊びにくるほど

嬉しいことはないだろう

漉音：

「ま、気楽にやれよ」

河南：「む…少々苦手だ」

玖珠：

「ほらほら、

会長さんもぱーんと、

楽しんでいけえ！」

だが河南の顔は

苦笑いで留まっていた。

河南：

「ふー…如月さんの

御両親はすごいな。

いつもこんな

感じなのか？」

渚：「んー、ですね」

それを聞いた途端、  
河南の顔が暗くなる。  
(なつたように見えた)

河南：

「そうか、

羨ましい限りだ」

漉音：

「…なあ河南。

どこか

悪いんじゃないのか？

その傷だって」

河南：

「な、何でもない！」

……結局

このあとも河南が  
話してくれることはなく  
空が暗くなってきたので  
帰ることになった

河南：

「それじゃあな、

由来、如月さん」

漉音：

「本当におくつて  
かなくていいのか？」

河南：「心配するな。  
私は河南亜希だぞ」

それだけ言うと  
河南は扉から姿を  
消してしまった。

## 第10話：修羅の極み

…こつそり  
あとをつけた。

だけど

勘違いしないでほしい。

俺は河南がまた

倒れたりしないかを

見守るだけなんだ。

本当だ。

本当に本当なんだ

あれ、誰に

訴えかけてるんだ俺は？

### 《修羅の極み》

とまあ古今みたく

心を荒読みしてくる

やつもないから

その話はおいという…

漉音：

「夏も終わったよな。

もうこんなに

暗いなんて　っ？」

前を歩いていた

河南の様子がおかしい。  
急に立ち止まっちゃまった

神妙に身を凝らす。

河南：

「……誰だ

そこにいるのは！」

いきなりバレたかつ！？

……というわけ

でもないらしいな。

河南より数m先、

3人組の輩が明らかに

河南に

メンチをきっていた。

河南：「……しつこいな」

輩A：

「いつかの借りがまだ

返せてないからなあ！」

何で

逃げないんだ河南は！？

女1人で男3人を

相手にできるわけ

普通は無理だろ！

河南：

「今日はもう暗い。  
生徒も

通行人もいないか」

輩B：

「ああ？

何言ってるんだ？」

河南：

「つまり、

今まで私は逃げる

ばかりだったが、

今日なら相手できる

ということだ」

それを聞いた途端、  
奴らが後退りする。

河南：

「どうした、

来ないのか？

なら今すぐ

私の目の前から

消え失せてほしい」

輩A：

「ち、畜生！

なめんなよーっ！！！」

男の1人が河南に  
向かって走り出す。

それを素早く

かわしたかと思うと、

男を容易く壁に

ひれ伏さしてしまった。

輩A：「ぐっ、ぐう」

河南は立ち尽くしている  
男たちを一瞥して、

河南：

「貴様らも

まだやる気か？」

輩B：

「ちい！」

きよ、今日のところは  
引き上げるぞっ！！」

そそくさとカッコ悪く

退散していく。

何だったんだ

あいつらは？

河南：

「はあ

お前もさつきから  
何してるんだ、由来」

……やっぱりバレてたか

漉音：

「お前を心配して  
ついてきたんだよ」

河南：「……ストーカー」

漉音：「あああああつ！！  
それだけは言うなあ！！」

屈辱とかそんな言葉に  
できるような  
レベルじゃなかった。

漉音：

「……そんなことよりもだ  
河南、  
何なんだあいつらは」

河南の口は

微かに開いたまま  
微動だにしなかった。

河南：「……言いたくない」

漉音：

「言いたくないって…  
河南、俺にもそんな  
話せないことなのか？」

河南：

「言ったら

由来の中にある

私の印象が180度  
変わってしまうぞ？」

漉音：

「それでもいいさ。

お前の全てを

俺は受け止めてやる」

目が見開く。

予想外の回答  
だったらしい。

河南：

「…私は以前、

この学校に転校してくる

前の学校で、

俗世間でいうところの

不良グループの

1人だったんだ」

漉音：「不良グループ」

河南：

「そんなある日、  
私の家は貧乏でな、  
夜逃げしたんだ。  
……親だけ」

漣音：「……親だけ？」

河南：

「私と弟を養える  
自信がなかったんだろう

それから私は働きにてた  
そして少しでも  
家計の苦しみを  
減らそうと、  
公立である今の学校に  
転校もしたんだ」

漣音：

「何かと  
大変だったんだな」

河南：

「だがそこに現れたのが  
さっきの奴らだ。  
あまりに  
しつこいものだから、  
もう辞めても  
いいと思って  
奴らの頭を叩き潰した」

漉音：「……………」

：なにを、叩き潰した？  
聞き間違えか？

河南：

「そしたら、  
そのグループから  
派生した別のグループが  
こんなところまで  
私をしつこく  
追いかけてきたわけだ」

漉音：

「じゃあ  
その腕の包帯も」

河南：

「ああ、  
不意をつかれてしまった  
追っ払ったがな」

漉音：

「……………今家には  
弟と2人暮らしか？」

河南：

「いや、  
弟は入院中で

今は独りだ」

漉音：

「まさか弟までも」

河南：

「ああいや、

これはまた別件だ。  
気にするな」

漉音：

「…なあ、

それなら俺ん家に  
来ないか？」

河南：「…なに？」

漉音：

「古今とかも呼んでぞ。

あと、

罹依とか結依とか、  
あいつらも呼んで」

河南：

「私のためだけにそんな  
彼らを巻き込む  
わけにはいかない！」

漉音：

「お前のため

だけじゃない、  
お前がこれ以上  
怪我とかしたら  
俺たちがひやひやして  
心臓にわりいよ。  
もうお前だけの  
問題じゃないんだ」

河南：

「…もう私だけの  
問題じゃない、か」

河南は

しばらく黙ったあと、  
小さく頷いて、

河南：

「なら、  
頼んでみようかな、  
お前に。」

私の運命を委ねるよ」

漣音：

「ああ、まかせとけ！」

そして俺たちは  
暗い夜道を街灯を頼りに  
俺の家に向かった。

河南：

「ボソツ」  
「ありがとな、漉音」

## 第11話：過去の使命

暗い夜道を独り歩く。

唯一の光源である

街灯に照らされた

漉音は河南と別れて

家路につくまで

終始溜め息をついていた

漉音：

「はあ…」

また帰ってきたか」

### 《過去の使命》

小さい町では

主流の一軒家。

しかし、漉音は

そんなことなど

どうでもよかった。

漉音：

「…母さん」

和室には無造作に  
物が置かれていて、  
横になっている

家具さえあつた。

とても人が

住んでいるとは思えないほどだ。

そんな中で一カ所だけ

綺麗に整っている

場所には1つの写真。

今は亡き漉音の母親、

親父の残した：

唯一の……形見だ。

漉音：

「ひとまず！

少しは

綺麗にしないとな」

散らかり放題の服、

倒れた家具など。

やることは沢山あつた。

漉音：

「こりゃ夜通しだな」

漉音：

「とうわけで

あとは頼んだっ！」

古今：

「いきなり連れてきて  
何言ってるか  
わかってますあなた!？」

古今を義理で連れてきた

古今：

「なに義理つて!？」

え、義理で

手伝わされるの僕!？」

漉音：

「なあ、頼むよ。

この近くにおいて  
俺の家の事情知ってるの  
お前しかいないんだよ」

古今：

「…そりゃね、

確かに由来の過去を  
知ってるのは  
僕だけだけどさ、  
そろそろ打ち明けて、  
罹依とかにも  
来てもらったら？」

漉音：

「変な心配を

あいつらには  
かけたくないし、  
もう時間が時間だ。  
もう観念しろ」

古今：

「くっ、こうなったら  
観念するしかないか…  
…って何故僕立場下！？  
なに、

言葉のマジック？」

ホント扱いやすいよな  
こいつは

そして俺たちは  
片付けを開始した。

古今：

「あ、そういえばさ、  
何でこんなこと急に  
しようと思ったの？」

古今が他の作業を  
しながら目を合わせずに  
こんなことを聞いてきた

漉音：

「何でって…」

明日から河南が

泊まりにくんだよ」

俺もまた

目を合わせずに

答えてみた。

古今：

「へえー、そうなんだ…

へえー……へ？」

ピタツと古今が

首だけをこちらに

向けてくる。

180°くらい。

古今：

「その言い回しだと

してすぐ死ぬわ！！

というかなに！？

河南明日から

ここに泊まるの！？」

漉音：

「予定ではな

古今：

「がっ……」

おそろしく

こいつの頭の中じゃ、

俺が河南と楽しく  
登下校して  
最高のスクールライフを  
おくっている  
描写が映ってんだろな

古今：

「何でそういう  
話になったかは  
知らないけどさ、  
よく向こうも  
OKしてくれたよね。  
ひとつ屋根の下  
男と2人つきりなのに」

漉音：

「ああ、それだろ。  
時々罹依たちにも  
来てくれるよう頼むって  
言ったらOKしてくれた」

古今：

「〜〜！！」

なんか苦悩してる。

時々壁に頭

ガンガンぶつけてる。

止める、

隣の白河さんとの  
親父っさんが……

「ガンツ！」  
ほら蹴り返してきた。

古今：

「ねえ！」

ぼ、僕も来ていい？」

漉音：

「そこらへんは  
罹依に一任する」

昔の俺じゃあ、  
こんな人を家に  
あがらせるなんて  
しなかつたるな。  
ホント：  
変わっていくな、  
俺の歩む道は

〈学校〉

罹依：

「おつはよー、漉！  
早速質問なんだけど」

漉音：

「ん、なんだ？」

罹依：

「こいつは何でいきなりあたしの目の前に朝っぱらから現れたわけ？」

右手には広辞苑、左手には古今、かまあ理由は察しがつくけどな。

漉音：

「昨日メールしたろ。それでこいつは僕も来ていいかって聞いてきたから、罹依に一任するって言ったんだ」

罹依：

「はは、それで」  
合点がいったらしく、古今の首根っこを持つ手の力が緩み、ゆっくりと、古今を窓から落とそうとしてた。

古今：

「だああーっ!!」

待った待ったああ!!」

結依：

「落ちれば

いいのに(笑)」

古今：

「何で笑ったあ!？」

罹依：

「3、2…」

地獄への

カウンタダウン。

古今：

「待った待った

待った待った待った

待ったああ!!」

罹依：

「1……ん？」

古今が教室の隅に

ポイと投げ捨てられ、

罹依が

窓の外に注目する。

結依：

「どうしたの

お姉ちゃん？」

罹依：

「なんかぞろぞろと

校門に向かつて

来てるわよ！」

漉音：「っ！」

まさか奴らがまた　　？

漉音：

「ちよつと席はずすぞ」

罹依：

「ちよ、

あんた、まさかっ！」

河南：

「っ！！」

ここまで来たか」

生徒の大半は

まだこの事態に

気づいてない。

追い返すなら

今しかない！

…俺ひとりで

追い返せるか？

河南：

「おい！……漣音っ！！」

呼びかけられた先には  
河南がいて、こっちに  
走ってきていた。

漣音：

「あれは…やっぱり」

河南：

「ああ…」

多分私目当てだ」

漣音：

「どつする、」

無理にでも追い返すか」

河南：

「駄目だ。

へたな刺激は

あいつらを余計

騒がせることになる。

話し合いで済まそう」

漣音：

「あいつらが

そんなこと聞くわけ」

河南：

「穩便に濟ませる。

生徒會長河南亞希、

それが今の私の使命だ」

## 第12話：連鎖反応（前書き）

`http://x44.peps.jp/shifia`

サイト開いています。

ぜひみてください

## 第12話：連鎖反応

一步、また一步と、

河南は今にも

飛びかかってきそうな

集団の中に堂々と

入っていった。

もちろん俺も

集団の中についていく。

河南：

「今日は何のよ……！！！」

河南の斜め前にいた

男が突然河南に

向かって金属バットを

振り上げた！

そしてそれを間一髪で

かわす河南。

漣音：

「話し合いの余地は…

ないみたいだな」

河南：

「漣音、ここでは

あまり荒事にするなよ。

いくら私でも

後々カバーできない」

漉音：

「わかってるさ……」

：「おい、素手相手に

武器使うなんて、

そんなに勝てる

自信がないのか？」

少しでいい。

下手な挑発じゃない、

こう言えば大体の奴は

不良A：

「なんだと…」

いいぜ、

素手相手には

やっぱり素手だよな」

よし、作戦成

不良A：

「でも、1対32とは

随分なハンデだなあ！」

っ！！

フェア精神が

なかったか！！

不良B：

「さあ、  
そろそろ時間だ」

…せめて竹刀、  
竹刀があつたら……  
いや、駄目だ！  
あれは使いたくない

不良B：  
「うおりゃーっ……！」

河南：  
「漉音っ……！」

### 《連鎖反応》

……っ。

俺は今指導室に  
河南と教師数人と  
一緒にいて、  
結論に至るまでは  
とても短い時間で、  
ごく簡単に済んだ。

《教師A：  
「それじゃあ、  
由来君、

君は2週間の停学。  
会長は始末書を  
明日までに私に  
提出するように」《

漣音：

「……………」

河南：

「んん……………」

失礼、しました」

その顔は

双方共に歪んでて、  
由来は無言だった。

河南：

「…漣音、すまん！！」

私を庇ったばかりに…

…停学…なんて」

河南の目に涙が溜まる。

漣音：

「な、泣くなよ？」

こんなん気にすんな。

たったの2週間だ。

それより

俺が心配なのは」

河南：

「や、奴らなら

もう大丈夫だ。

今回のことを受けて

警備員が

常時付くそうだ」

漉音：

「なら良かった。

でも俺が心配してるのは

そのこととお前の」

河南：

「もう

喋らなくてもいい。

詫びとってはなんだが

今日から家で

料理の手伝いをする」

漉音：

「あ、そうか。

今日から

来るんだったな。

でも手伝いなんだな」

河南：

「漉音が社会に出たとき

料理も出来ないやつだと

困るからな」

漉音：「…ん？」

由来がいつもの  
響きの違いに気づく。

そういえば  
前から時々

漉音：

「いつから河南は  
由来から漉音で  
呼ぶようになった？」

河南：

「ん、ああ。  
いや、こっちの方が  
呼びやすいかなと  
思っただけだ。  
いやなら戻すぞ」

漉音：

「いいや、  
俺もそっちの方が  
最近馴れてるからいい」

河南：

「そうか…  
なら早速だが漉音」

改まった感じだ。

なんかいい。

漉音：

「なんだ？」

河南：

「如月さんとは  
うまくいつてるのか？」

漉音：

「なああ！！！」

何で罹依も河南も

それをいきなり

話題に出すんだよ！

河南：

「わっ！驚かすなよ」

漉音：

「お前も

俺を驚かすなよ！」

こんな会話が

帰り道、延々と続いた。

あとのことも知らず

古今：

「よっしや〜」

9だドバアーツツ!!」

古今、宙を舞う。

罹依：

「え〜と、

あんたの目何だっけ」

古今：

「い、1です、はい」

罹依、古今をしばく。

結依：

「私はあがりです」

罹依：

「な、いつの間に!？」

結依、

ちゃっかりあがる。

知美：

「やったー、

月の土地だー」

渚：

「知美ちゃん、

物凄く棒読みですよ」

知美、月を支配する。

渚：

「まあ銀行ははじめから私の手の中に  
あるんですけどね」

神崎：

「卑怯ですね」

渚、不景気知らず。

それを見ていた

由来と河南。

渡音 & amp ; 河南：

「……………あれ？」

不法侵入じゃないか？  
ついに心だけじゃなくて  
鍵型も読まれた？

罹依：

「遅かったわね。  
もうお邪魔してるわよ」

渚：

「おかえりなさい、  
由来君」

古今：

「まさかお前ら  
帰り道にずっ　！！」

何が起こったかは  
スルーで。

結依：  
「お邪魔してますね」

知美：  
「こんばんは、漉君」

神崎：  
「…なんですかそのどうやってというかいつの間に勝手に俺ん家に  
不法侵入しといて「お邪魔してます」の一言で片づけようとしてい  
る分際でまだ人　」

漉音：  
「わかった、  
わかったから！」

神崎：  
「やっぱり最後はそんな呆気ないしめですか。それとも態と私たち  
を蹂躪するためのフェイクとして　」

漉音：  
「うあああーっ！！」

時は既に22:00、

緊張がほぐれて  
河南にも  
笑みがこぼれる。

第13話：始まりはいつも…

翌日、晴れやか朝、  
エスケープしようとした  
俺の作戦は  
華麗に失敗に終わった。

《始まりはいつも…》

河南：

「じゃあ朝ご飯は  
作っておいたから  
早めに食べてくれ」

既に支度を始めていた  
河南が作っただらしい。  
確かに今までにない  
香ばしい匂いが  
漂ってくる。

罹依：

「それじゃ、  
いつてきまーす！  
間違ってもエスケープ  
しようだなんて  
考えるんじゃないわよ」

流石察しのいい。  
だがここは俺の家、  
俺だけが知ってる  
脱出口なんて  
幾らでもあんだよ。

知美：

「漉君行ってくる」

結依：

「行ってきますね」

さらに2人が  
扉から出て行く。

渚：

「由来君、  
行ってきますね」

漉音：

「ああ、  
楽しんでこいよ」

そしてまた1人。

神崎：

「私はバイトでも  
探しにいってきます」

漉音：

「頑張つてな」

今思えば神崎はもう  
家に1人なんだよな。

古今：

「んじゃ、

僕も行つてく」

古今の動作が止まった。

玄関、男、ふたりきり、  
変な感じた。

早くfly awayしてこい。

古今：

「そつだそつだ！

言うの忘れてたよ」

漉音：

「なんだ？」

古今：

「僕も扉閉めるの

手伝つたから。

じゃーねー」

……？

「僕も扉閉めるの  
手伝つたから」

………。(。；)!!

しまった!

思わず絵文字を

出しちまうくらい

驚いてしまったああ!!

漉音:

「あいつも俺の家を  
知り尽くしてたかあ」

きつと罹依に

強要されたに違いない。

だって顔こそ

特に言わなかったが

目に青いあざが

できてたからな。

漉音:

「でも、

探さないよりましかつ」

胡座の状態から

立ち上がり、

辺りを見回す。

居間の窓は外部から

徹底的に固定か…

いや、そしたら

換気できねえじゃん。

やりやがったな  
あの無敵超人。

玄関は…

見るまでもなかった。

まさかの《KEEP OUT》。

何で外が

危険地帯化してんだよ。

あいつら

危険地帯に笑いながら

飛び込んでったぞ。

2階は…ん？

開いてるな、

忘れてたのか？

それとも流石に

ここからは逃げはしない

だろうと甘くみたな。

残念だったな。

実は見えにくいが

梯子が眠ってんだよな。

これで俺は安心して

エスケ……プ？

地面いっぱい広がる

いとせぬ地獄絵図。

おい、

針山に古今の私物が

見るも無残な姿で

放置されてるぞ。

なんだ、

罹依か、河南か？

まあ俺のじゃないから  
構わないけど。

漉音：

「エスケープは不可か」

諦めたよ、

ああ諦めましたよ。

こんな大仕事いつ

あいつらこなしたんだ？

その時、

ピンポンと

来客が来たようだ。

この家に、珍しいな。

漉音：

「はい、

今開け…ま、す」

？：

「…やあ、久しぶりだ」

何で…こいつが？

？：

「たまたま近くに

立ち寄ったものだから、  
来させてもらったよ」

この弱々しい声、  
雰囲気、そして顔。  
一生忘れるような  
はずのない……  
俺の……父親だ。

漣音父：  
「…私の顔に何か  
ついているかい？」

漣音：  
「こ…どの面さげて  
ここに帰ってきたっ!!」

漣音父：  
「……」

相も変わらず  
少し微笑んだままだ。  
昔から、今も。

漣音父：  
「ちよつと…母さんと  
会わせてくれないか？」

漣音：

「母さんなら  
死んでるだろ」

冷たく言い放つ。  
別に

母さんの死んだ原因が  
こいつのせいでは  
ないことはわかってる。  
問題はその後だ。

漣音父：

「そうか」

そうだったな。

なら家にあが」

漣音：

「断る！」

漣音父：

「ん……」

そういえば

学校はどうしたんだ？」

漣音：

「ちっ、

停学くらったんだよ」

漣音父：

「なんで」

漉音：

「あんたには  
関係のないことだ!!  
もういいだろ、  
さっさと行ってくれ」

許せなかった。

俺を置いていった

あいつが許せなかった。

ただそれだけ、

仕事だなんてことは

重々承知だった。

でも、せめて……

漉音父：

「…じゃあ、

もう行かせてもらおうよ」

漉音：

「ああ」

ぶっきらぼうに言った。

それでもあいつは

微笑んでいた。

罹依：

「たっだいま〜!」

漉音：

「あれ、  
家に連絡とかいいの？  
いきなりこっち来て」

罹依：  
「とつくの昔にね」

漉音：  
「ていうかなんだ  
罹依、あれは」

罹依：  
「あれ？  
：あゝ、あれね」

漉音：  
「俺はな、  
停学なだけであって、  
家宅謹慎  
じゃないんだぞ」

罹依：  
「エ、イコールデ  
ツナゲナイノ？」

とぼけやがって、  
お前はカタカナ語は  
似合わないんだよ。

知美：

「今帰ったよ」

古今：

「たっだいま」！

ボグツ、ドガツ！

穉依：

「真似んじゃないわよ」

古今：

「知りませんけどっ！？」

と、ここまでで

気づいたことがある。

漉音：

「河南と早瀬は？」

あと渚も」

知美：

「亜希さんと

結依ちゃんは

生徒会の仕事だっ」

古今：

「渚ちゃんは

一度家に寄るんだっ」

漉音：

「そうか」

罹依：

「ねえ、明日土曜だし

漣も連れて

繁華街に行くわよ！」

漣音：

「ゲーセンか？」

罹依：

「いちいち

どこに行こうかなんて

決めるの面倒だから

全部行けばいいのよ」

なんて大雑把！

そういえば

部活乗っ取り作戦の時も

似たような場面に

出くわしたな。

渚 & a m p ; 河南 & a m p ; 結依：

「ただいま」

そこに渚たちが

まとめて帰ってきた。

ちょうどそこで

出くわしたらしい。

罹依：

「ようーし！」

明日楽しむわよー！！

古今送別会い！！！」

バタンツ！

扉の陰から燃え尽きた

古今の亡骸が…

漉音：

「古今んんー！！！！（笑）」

古今：

「笑うところ

じゃないよねえ！？」

## 第14話：咲き散る渚

後日、

華やかな衣装のもと、

古今朱雀の送別会が  
執り行われ

古今：

「死んでないしね!？」

何度言ったら

わかんのあんたら!

それに憤ましい

衣装じゃないんだ、

華やかな衣装なんだ!！」

罹依：

「じゃ、留守番

頼むわね〜、古今」

漉音：

「変なところ

いじるなよ〜」

河南：

「留守番を引き受けて

くれるなんて、

少し見直したぞ。

じゃあな」

古今：  
「…へ？」

古今、お前は  
気づくべきだったな。  
昨日お前が  
寝静まったのを  
見計らって俺たちだけで  
会合を開いたことをな。

結依：  
「それじゃあ後は」

知美：  
「いつてきまーす」

神崎：  
「私はバイト探しに  
行ってきますね」

古今：  
「え、え、何っ？  
計画的な仲間外れ？」

遅いぜ。

渚：  
「古今君…」

古今：

「な、渚ちゃん…」

まあ、この前のように  
いけばあれだな  
今回は指示しなくとも

渚：

「後はよろしく  
お願いしますねっ！」

突き放してドーン！

ニコツと渚は笑った。

古今は精神的に

2 4 5 3 7 8 1 4 6  
ダメージが  
クリティカルヒット！！

古今は目の前が  
まっしろになった

古今：

「…いいよ、  
放っておけよ」

あ、いじけた。

漉音：

「あ、そうか？  
ならこの家の鍵を」

古今：

「そこは引き留めて!?!」

《咲き散る渚》

古今? :

「(泣)!!」

漉音 :

「罹依、古今の顔が  
サブタイトルを  
入れた隙になんか  
放送禁止コード”ピー”で  
塗りつぶさなきゃ  
いけないような顔に  
整形されてるぞ」

罹依 :

「元々あんなもんよ」

河南 :

「ここで選択肢だ。」

・今日は諦めて  
ひとり寂しくここで  
留守番をしておく。

・その醜い顔で  
羞恥を晒しながら

私たちから距離をおいて  
行動を共にする

どっちをとる？」

史上最悪の選択肢だな。

古今：

「どっちも嫌じゃ！」

河南：

「じゃあ選択肢を  
もうひとつ加えよう。

・死ね

これで

選びやすくなつたら、  
多分お前は3つ目を  
選ぶことにな  
るだろうがな」

…ていうか

命令形だしな。

古今：

「つてことは…」

罹依に殺されるう！！」

罹依：

「何であたしなのよ！」

古今：

「ギャー！！！」

古今、羞恥どころの  
問題じゃなくなったので  
留守番に強制的に決定。

俺たちの町には  
そういう遊び場は  
まず建っていない。  
そこで毎回バスを幾つか  
乗り換えしないと  
いけないんだ。

罹依：

「んんん着いたっ！！！」

おもいつきり  
背伸びをする。  
数十分バスに乗ってた  
だけだろうが。

河南：

「はじめはどうする？」

結依：

「あつ、私

映画館に行きたい！」

罹依：

「よし決定！」

じゃ、お金

よろしくね、漣」

漣音：

「そのための俺か！！」

なんてこった…

まさかはめられた？

くそっ、こんなことなら

あいつ

連れてくりゃよかった

ふと罹依を横目で見ると

…あいつ、

してやったみたいなの

顔してやがるな、

確信犯か。

…なにに！？

河南までもが

してやった顔だと！

あいつら、

俺の見てないところで

共謀してやがったのか

漣音：

「わかったよ、

払えばいいんだろ」

罹依：

「さっすが〜!!」

古今だと周りから

まきあげてる感じに

見られるから

嫌だったのよね〜」

漉音：

「……………」

もういい、何も言わん。

映画館、服屋、

カラオケ、ファミレス、

ゲームセンターと

まわりにまわって……………」

罹依：

「もっつ!!」

どうなってんのよ

このポンコツ機械は!」

店員：

「そ、それは

お客様がボタンを強く

叩きすぎなのが

問題かと」

罹依：

「知らないわよ、

取り扱いの注意 にも

「この機械の

ボタンは強く

叩かないでください」

なんて書いてない

じゃないのよ！」

店員：

「そんなこと

言われましても」

この状況がみなさんには

お分かりだろうか。

罹依がゲーセンの店員を

脅して…ん？

ゴハッ！！

…… UFO キャッチャーが

不慮の事故により

壊れてしまったのだ。

それを店員に

文句しているのである。

（実はボタンを無駄に

力強く連打して

逆に弁償しなければ

いけない立場なんだが…

物が物なんで  
俺も罹依側に  
まわるしかない。  
すみません、ちょっと  
年上の人生の先輩)

漉音：

「まあまあ、  
それくらいにしとけよ。  
あんたも大目に  
みてくれ、な」

店員：

「しかしこのまま  
使えないんじゃない？  
…  
僕の…くびが」

…おい罹依。

何てことしやがった。

お前の出現により

この一店員が

人生狂いそうなんだぞ。

狂い咲きそうなんだぞ。

ま、まさか私だって

ここまで発展するとは  
思ってたかったのよ

知美：

「店員さん店員さん。」

これ、直ればいいの？」

いたあああああつ！……！

ここに日本を誇る

最強の天才がああ！！

店員：

「な、直せませんよ…

さすがにこれは」

知美：

「うっん、まかせて」

ここまで説得力のない

緩やかな口調の娘を

見るのは初めてだ、

でも言いたそうな

店員さんだった。

しばらくして、

俺がドライバーとかを

調達して知美に渡すと、

説明書を見るなり

ものすごい勢いで

いじくりだした。

店員も啞然としている。

知美：

「ふーっ…

これで動くはず」

店員：

「あ、ありがとう  
ございます!!」

いや、ホントは  
俺たちが言うべき  
台詞なんだがな

罹依：

「知美」

あんたやるじゃない!!」

漉音：

「原因作った  
お前が言うな」

罹依：

「キニシナイ  
キニシナイ〜!!」

目は完全に

泳いでるけどな。

結依：

「今日は楽しかったね」

河南：

「またこうして  
みんなで

行きたいものだ」

漉音：

「俺は今日だけで  
人生の75%くらいの  
ドツキリを  
味わったんだが」

なんやかんやで、  
一番楽しんだのは  
俺だったのかもな。

夕焼け、

俺たちは談笑に沈んだ。

俺たち高校生には、  
越えなきゃいけない  
壁がある。  
その意味が  
おわかりだろうか？

表現を変えると、

《避けては通れない壁》

…つまり、あれだ。

先生：

「古今、今日から  
1ヶ月間放課後補習だ。  
由来……お前もだな」

古今：

「ぎゃあああああ！！  
放課後の楽しみがあ！！」

そうテストである。

そしてこの日、

部活にはしばらく

行けないことが

決定した日でもある。

放課後、部室

罹依：

「おつはー…つてあれ？

まだ誰も来てないの？

せっかく停学期間終了

お祝いしようよ

思ってきたのにさ」

その時部屋の扉が

いきなり開き、

思わず「ひゃっ！！」と

柄にもない声を

出してしまった。

渚：

「り、罹依さん…」

みなさん…テストの」

罹依：

「ちよ、ちよつと渚！？  
あんた大丈夫？」

明らかに今までと

様子が違っている。

倒れかけた渚をそのまま  
抱きかかえる。

罹依：

「熱っ！！」

額に手を

添えただけだった。

この熱さは

普通じゃない！！

罹依：

「ど、どうすれば……」

そうだ！

漣のやつを！！

あいつ、彼女が

倒れたっていうのに

何してんのよ

電話をかける。

(早く…でなさい！)

漣音：

「…ぐっ、ぐお……」

はっ……ぐう」

無性に眠たい。

これちゃんと受けないと  
いつまでたつても  
渚に会えないな

「プルル、プルル！」

漉音：

「うおっ！！」

なんだなんだ……って  
電話かあ」

先生：

「電話かあ……じゃない！  
由来、携帯没収するぞ」

漉音：

「そ、それは  
ちよつとな」

机の下で勘だけで  
携帯を触る俺がいた。

もう何年も使い古した  
俺の相棒なんだ、  
間違えて変なところを  
押すわけがない

ポチッ。

「漣——うう!!!!」

あんた聞いてんのー!?!」

部屋いっぱい流れる

受話器先の声。

間違いなく罹依だ。

…まわりからの視線が  
こんなにも痛いなんて  
思ってもみなかったぜ。

先生：

「……由来、

5秒だけやる、出る」

漣音：

「ん……なんだ罹」

罹依：

「渚が!!」

渚が倒れたのよ!!」

っ!!

渚が…倒れた?

漣音：

「わかった、

今すぐに行く!」

俺は荷物を部屋に残し、  
席を立った。

先生：

「なっ！

由来、出るってというのは  
そういう意味じゃ」

今の俺には…

ただのノイズだった。

漉音：

「……」

玖珠：

「…別にお前の  
せいじゃねえんだよ。  
しゃきつとしゃがれ」

漉音：

「あんだこそ  
いつもみたいに  
しゃきつとしろよ」

玖珠：

「あんっ！？」

環那：

「まあまあ…  
由来さんは玖珠さんを  
元気づけるために」

玖珠：

「こんなやつに  
俺が元気づけられて  
たまるかああ！！」

場所は渚の家、  
居間に渚を除いて  
俺たちはいた。

環那：

「もともと体が  
弱い子でしたから…  
昨日の疲れが出たのかも  
しれませんね。  
心配しなくて  
いいですよ、また  
前みたいに学校にすぐ  
行けるように  
なりますから、ね」

俺に心配かけないように  
するためか、優しく  
声を声をかけてくれる。

でも俺はあいつのところに  
すぐ行けなかった

漉音：

「…俺、渚の横に  
ついててもいいですか」

玖珠：

「ああ!？」

お前はな、さっさと」

環那：

「はい、そうして  
あげてください」

玖珠：

「そうだ、  
そうしてあげてください  
……ちがーう!」

## 第15話：霜は降り立つ

…雪が舞っている。

木々の枝についでた

緑葉はいまや雪の下だ。

前まで頭の上に

あったものが今じゃ

足で踏みつけられる、

なんか可笑しいよな。

…今更かもしれないけど

俺は、この町が好きだ。

好きだった。

何もかもが

移り変わってく、

それは仕方のない

ことだつて頭の中

じゃわかってたさ。

わかってた…

つもりだった。

漣音：

「もう、冬か」

俺はいま…何をしてる？

《霜は降り立つ》

季節の変わり目は  
体調を崩しやすいなんて  
昔からよく聞いてたけど  
いざ渚が体調を崩すと  
俺は何も出来やしない。

毎日家に寄って、  
夜になるまで横にいて、  
ひとり家に帰る。  
この繰り返し。  
俺にはこれしか  
出来ないんだ。

渚は

「それだけでも嬉しい」  
とは言ってくれるが  
俺が納得できない。  
俺はもっと、もっと、  
渚や罹依や河南や  
知美や古今や仙里や  
他のやつらと  
楽しく残った学園生活を  
過ごしたかった

古今：

「なーに、らしくない  
顔してんだよ！」

罹依：

「渚のためにも、  
あんたがそんなんじや  
きつと悲しむわよ」

漉音：

「……」

前みたいに、  
いつも通りに  
話が出たかった。  
でも俺の喉が声を  
つぶしていた。  
俺は何も言えなかった。  
ただ、机に伏せていた。

古今：

「…なあ由来、  
ちよつと立てよ」

迷わず俺は立てた。  
次に起こることなんて  
わかりきってたさ。

ボガッ！！

顔をおもいつきり  
殴られた。

古今：

「そんな顔じゃねえよ  
お前の顔はああ！！  
お前いまの顔見ろよ、  
そんな顔で渚ちゃんは  
喜ぶと思ってるのか！」

俺はもうな、

疲れたんだよ古今。

こんな学校、

もう価値なんて

俺にとつてないんだよ。

罹依：

「…漣」

でも俺は卒業するまで

ここの生徒だ。

渚もここの生徒だ。

時間がたてば

渚だって良くなる。

また、学校で

演劇でもなんでも

出来るようになるんだ。

それまでだ…それまで、

今は我慢するしかない

環那：

「…そうですね、はい。  
お手数おかけします」

受話器を置く手は  
少なからず震えていた。  
学校からの電話だ。

そこに野球から  
帰ってきた定食屋店主、  
玖珠が現れた。

玖珠：  
「…ん？」

どうした環那、  
顔がうかねえぞ」

環那：  
「…玖珠さん  
…実はですね…  
さつき学校から  
直に連絡があつて」

玖珠：  
「え」

その意を察してか、  
手からするりと  
缶ビールが滑り落ちる。

放課後、  
誰とも話さず  
真っ直ぐ渚ん家に来た。

漉音：

「ちわつす？」

レジでくわえ煙草してる  
馬鹿面おっさんを  
発見した。  
目が遠い…  
黄色のネズミがいたなら  
鋼鉄の尻尾で  
殴りつけたいくらいだ。

漉音：

「どうしたよおっさん」

反応がない。  
ただのおっさんだ。

玖珠：

「反応しなかったら  
ただのおっさんて  
どういうことだよ。  
おっさんじゃねえ、  
玖珠様と呼べ。  
…冗談はいい、  
さっさと来い。  
お前にひとつ

話しておきたい  
ことがある」

漉音：

「はあ  
」

漉音：

「……は？

冗談はなしだろ？」

玖珠：

「冗談じゃねえよ。

現実問題だ」

テーブル挟んで

俺、玖珠環那さん。

出された話題は、

《渚はもう1年、

最悪学校に

いなきやならねえ》

環那：

「先程、学校から

連絡があつたんです。

「このまま休み続けると

出席日数が

足りなくなつて、

留年しますよ」って「

環那さんの口、

いや世界がとても  
スローモーションに  
感じられた。

漉音：

「お、俺はイヤだ」

玖珠：

「イヤだ言うな。  
もう大人だろうが」

渚が留年すれば  
俺は少なくとも渚と  
一緒にいられる時間が  
減ることになる。  
渚からしてもそうだ、  
きつと自惚れじゃない。

玖珠：

「まあ、

まだ決定した  
わけじゃないから、  
修正は何度でもつく。  
あと2週間、  
それがあいつの  
卒業への道だ」

漉音：

「2週間」

渚：

「はい、2週間です。  
さつきお母さんから  
聞きました」

見た目はいつもと  
変わらないのに

渚：

「まだ卒業式まで  
3、4ヶ月ありますし、  
きっと大丈夫です！  
治しますから！」

努力家で元気で  
しっかり話せるのに

渚：

「また、明日です」

どうしてお前は  
俺たちが大好きな学校に  
行けないんだよ

部屋に帰ってからも、  
それしか  
考えなかった。

-----

謎の者：

「まずは如月渚：  
そしてこの子。」

一面白い景色に

小さな光が漂う所に

”者”と子がいた。

子の方は今も目を閉じて

開ける気配はない。

そして横たわっている。

謎の者：

「選択肢はもうない。

運命は決まったんだよ、

由来漉音。」

言い得ぬ旋律が歌った。

## 第16話：君と紡ぐ世界

罹依：

「クツリスマス！

クツリスマス！！

古今の血が散る

赤色おじさん

「サンタさん〜イエイ！」

古今：

「リアルに恐いわっ」

《君と紡ぐ世界》

今日は12月24日。

俗にいうイヴだ。

今はみんなで

渚ん家に取り込んで

部屋やツリーに

装飾を施してる。

渚：

「私も手伝いますよ」

結依：

「大丈夫ですよ」

渚ちゃん。

今はまだ体を  
休めておいてください」

罹依：

「その通りよ渚。

あんたは今

体を治すことだけを

考えてなさい！」

渚：

「でももしたら

サンタさんからの

プレゼントを

決められませんよ？」

漉音：

「はあ？サンタさんなら

すぐそこで煙草吸っ！？」

突然おっさんに

口を抑えられ

部屋から出される。

玖珠：

「あいつはまだ

サンタを信じてんだよ。

おめえはあいつの

子ども心を

ぶち壊す気か？」

漉音：

「早く世間的に  
教えるよおっさん。  
あいつ面接とかで  
笑いにされるぞ」

玖珠：

「そいつは  
そうなんだがな」

頭を掻きながら

「うーん」と

考え込んでしまった。

玖珠：

「まあ、何というか。  
とりあえずほっとけ」

スウー

(襖を開ける音)

漉音：

「渚ー！」

おっさんから

重大発表が

あるみてえだぞー」

玖珠：

「おめえは…」

「コンニャローツー!!」

環那：

「はい、じゃあ  
写真撮りますよー」

クリスマスツリーを  
後ろに置いて

俺、渚、古今、羅依、  
早瀬、河南、神崎、  
知美が渚を中心に  
屈んだりして  
位置を整える。

環那：

「玖珠さんは  
入らないでくださいね」

後ろを振り返ると  
ぱっちりピースしてた  
おっさんがいた。

玖珠：

「べ、別にいいだろ？  
な、渚? : 渚?  
なあ、お父さんを  
無視しないでおくれ」

渚：

「んー、じゃあ  
お父さんはサンタ役を  
お願いしますね」

急遽おっさんに  
白い髭、赤い帽子、  
赤い服に大きな袋が  
追加装備され、  
端から見れば  
誰だかわからない。

玖珠：

「俺は…  
みんなに夢を運ぶ  
サンタなんだよな。  
よな？由来よ」

漉音：

「環那さん、  
準備オーケーです」

華麗にスルー。

環那：

「はい、じゃあ、  
撮りますよー」

環那さんもスルー。

環那：

「はい、チーズ！」

写真は無事撮られた。  
みんなが意気揚々と  
笑いあいながら  
写真を彩っている。

みんなが楽しくて、  
俺も楽しくて、  
この先のことなんか  
誰も考えやしなかった。

何ヶ月かしたある日、  
ホームルームが終了した  
俺たちのクラスの  
体育館への列は  
きれいにできていた。  
今日に限っては  
珍しくはない、  
なぜなら…

漣音：

「古今、  
ちよつと付き合え」

古今：

「由来…僕と  
そんな関係をお前は  
築きたかったのか？」

漉音：

「今日はもう  
ツッコまないからな、  
ほら行くぞ」

古今：

「どっこ」

漉音：

「適当にそこら  
ぶっ潰せば  
留年くらいなるだろ？」

古今：

「由来、お前」

漉音：

「そうでもしないとよ、  
あいつが…渚がまた  
ひとりぼっちに  
なっちまうだろ」

これが俺の今の心境だ。

そう、こうでもして

俺が残らないと

渚はひとり残される。

渚は…留年した。

俺には耐えられない。

古今：

「馬鹿かお前はよお」

漉音：

「あ？」

古今：

「渚ちゃんは、

お前にはここに

残ってほしくないって

言ってたんだよー！！」

漉音：

「古今！！」

なんつった今あー！！」

古今の言葉が

俺の琴線にふれる。

古今：

「ここにはまだ

河南たちがいるだろ！

それに渚ちゃんは

お前に自分のために

立ち止まってほしく

ないんだよー！！」

漉音：

「っ！！」

立ち止まって  
ほしくないから  
あいつは俺に

今日ただ

いってらっしゃい、と  
言ったのはそのためか

先生：

「決心がついたな」

古今 & a m p ; 漣音：

「！いつの間に」

一瞬逃げようかと

思ったがしなかった。

雰囲気がいいつもとは  
違っていたからだ。

先生：

「お前たちも

今日でここを卒業する。

思い出すなあ、

あの日、私が

君たちを会わせたのを」

あの日、入学式か。

あの時から俺も古今も  
不良に近い状態だった。

ただお互いを  
知らなかった。

そこに何の偶然か  
俺と古今が  
お互いを知った。  
別にそれは  
ただの偶然だと  
今まで思っていた。  
まさか全部  
仕組まれてた  
ことなんてな。

先生：

「あの時の選択は  
正しかったようだ。  
君たちの巡り合わせは  
互いを良い方向へと  
導いたみたいじゃな」

古今 & amp ; 漣音：  
「……………」

俺は最初

こんなくだらない毎日が  
のうのとただ  
過ぎていくだけの  
この学校が嫌だった。

でも、今考えれば  
そう悪いことじゃ  
なかったみたいだな

先生：

「…っと、

もうこんな時間か。

私も今年で

定年をむかえる。

君たちと会うのも

きつと最後じゃな

じゃ、君たちも

急ぐんじゃないぞ」

漉音：

「…あ、あの」

先生：

「…そうそう。

さっきこの学校を、

なんじゃったかの。

ぶつ潰せば、か？

もう歳じゃの〜

忘れてしまったわい」

振り向くこともなく

体育館に歩きながら

そんなことを

先生は呟いた。

漉音：

「せ、先生！」

歩く足が止まり  
ゆったりと振り返る。

古今&amp;・漣音：

「今まで、

ありがとう

ございましたっ!!」

深々と頭をさげる。

俺たちを巡り合わせた

この恩はこれですか、

俺たちには

これくらいしか

出来なかった。

精一杯の感謝だった。

先生：

「うん、うん。

…さて、行こうかの」

卒業式は無事に終わり、

俺も古今も罹依たちも

みんな卒業証書を

今手にしていた。

校門前では

卒業した生徒たちが

写真やらなんやらで

がやがやと騒いでいる。

罹依：

「ねえ渡、

これから二次会

やるんだけどさ、

あんたも」

漉音：

「いや、俺はいい」

罹依：

「…そうよね。

待ってるのよね。

早く行つてきなさい」

漉音：

「…すまねえ」

久々の町は

明るく色鮮やかだった。

こんな昼間に

この道を通つたことは

一度もなかったな

そっぴゃ。

店の前では

まだ眠っているはずの

渚が立っていた。

漉音：

「まだ眠ってないと駄目って言ったろ？」

渚：

「大丈夫ですよ。」

それに、眠ってたら

漉君の制服姿が

もう見れませんし」

声が出ていない。

まだ無理をしてるんだ。

漉音：

「制服なんて

いつでもを着てやる。

ほら、布団に」

渚：

「はい、でも

あの学校の生徒でいる

漉君を見たいんです。

…少し歩いても

いいですか？

漉君と手をつないで」

渚からそんなことを

言うなんて初めてだ。

なら俺は渚の意志を

尊重しなくちゃ…な。

漉音：

「ああ、じゃあ歩くか」

渚：

「はい」

渚の小さい手が

俺の手におさまって、

しっかりと握り合う。

渚：

「また、この町でいつか  
歩きましょう」

渚の優しき、

それだけが今

俺を満たしていた。

## 第17話：澄み渡る一步

明くる朝、

俺はいつもの通り

店の掃除を済ませてから

朝食を食べていた。

渚：

「あ、漉君。

おはようございます」

漉音：

「ん、おはよう。

学校頑張れよ、

今日始業式だろ？」

渚：

「はい！

だから河南さんたちと

一緒のクラスに

なれたらいいな〜って

思ってますっ」

漉音：

「よし、その意気だ！

頑張れ、渚」

渚：

「はい、

行つてきます、漉君」

渚はドアを出るとき  
少し微笑みながら  
家をあとにした。

そう、

俺の卒業式から  
早1ヶ月。

渚は留年はしたものの  
せめて卒業はしたいと  
そう決心し、  
河南と同じ学年で  
今年を過ごすみたいだ。

俺はというと  
高校を卒業したあと  
進学する気などなく、  
渚の家で泊まり込みの  
バイトをしていた。  
でもそれだけじゃ  
申し分ないのも  
わかってたし、  
家事なども手伝ってる。

あの2人は  
相も変わらずあの調子。  
食卓から笑い声は  
絶えることがない。

漉音：

「お！」

玖珠：

「ち…渚に会うこと  
出来なかったか」

そこに今目覚めたらしい  
サボリ店主が来た。  
渚に会いたかったのか、  
惜しかったな。

漉音：

「渚なら今行つたぞ」

玖珠：

「お前は会えたのかよ。  
…渚なんか俺に  
言つてなかったか？」

漉音：

「ふつつか者ですが  
よろしくお願いします、  
お父さん！つてな」

玖珠：

「なんで俺が娘に  
よろしく言われないと  
だめなんだよッ！！  
しかも何だ？」

言ったのかそれ!？」

そこを信じるなよ

漣音：

「ほら、そろそろ  
店開けるぞ。

着替えてこいよ」

玖珠：

「ああ、すまねえ…  
…つて立場の逆転!!」

渚：俺も頑張るからな。

《澄み渡る一步》

―学校―

渚：

「クラス…クラス…  
あ、ありました!」

力行も見てみましょう。

河南さんが  
いるかもしれません。

河南：

「！渚さん、  
お久しぶりだ」

河南さんが  
向こうからこちらに  
呼びかけながら  
近づいてきました。

渚：

「河南さん！  
今年ももう1年  
よろしく願いします」

河南：

「ああ…だが  
クラスは違ったようだ」

クラスが…違うのか

河南：

「でも  
困ったことがあったら  
何でも言ってくれ。  
私は渚さんの  
隣のクラスだ」

渚：

「はい、勉強  
頑張りましたよ」

ガラッ

教室のドアを開ける。  
そこには暖かな  
陽射しが射っていて  
ぽかぽか陽気。

渚：

「もう…

いないんですよね」

部屋を眺めるだけで  
心に思い出される

みんなとの日々。

漉君がボケて、

知美ちゃんがつたない

ツッコミをして、

古今君が冗談を言ったら

罹依さんが古今君を……

これ以上は

言わないでおきます。

言い難いのもありますが

思い出せば

思い出すほどに、

みんなが、恋しくて。

渚：

「私、頑張ります！」

まだ時間があります、  
頑張らないと！

「焼肉定食ひとつ」

漉音：

「はい！

おっさん、焼1っ」

玖珠：

「おっさん言うな！」

環那：

「はい、どうぞ

お召し上がりください」

昼頃になると

会社の合間や

トラックの運転手が

主な相手となる。

もう食べるのなんの

玖珠：

「手エ休めんじゃねえ、

ほら、焼1ー丁」

漉音：

「わかってる。

んと、よっと！」

この需要に対して  
3人はキツいな、  
猫の手でも  
借りたいぐらいだ。

?:

「貸しましょうか？  
猫の手」

漉音:

「あ?……お前」

仙里:

「お久しぶりです、  
由来君」

最後に会ったのが  
いつだったか。  
相当前だったはずだ。

漉音:

「お前学校は?」

仙里:

「僕はそれどころ  
じゃないので。  
色々忙しいですよ」

仙里は幽霊

みたいなもんだ。  
彩音と一緒に  
もうホントは死んでる。

玖珠：

「おい小僧！

客と喋ってる暇…あん？  
てめえのダチか？」

仙里：

「あ、はい。

僕、仙里と」

玖珠：

「ちようどいい。

猫の手でも  
借りたかったとこだ。  
よし、手伝え」

仙里：

「へ？あの」

玖珠：

「環那！

お前は裏の花しとけ！  
皿洗いは小僧の  
ダチがしてくれるっ」

環那：

「あら、本当ですか？」

では私は花屋の方に  
「

仙里：

「いやあのだから  
」

玖珠：

「エプロンは

そこにあるから

早くやっといてくれ  
」

仙里：

「……はい  
」

## 第18話：忠告の標

仙里：

「今の生活どうですか？」

漉音：

「ん？どうって」

洗い場で仙里と一緒に  
皿洗いをしていたとき  
ふいに訊かれた。

漉音：

「満足…じゃ駄目か？」

仙里：

「くすつ、

由来君らしくない」

漉音：

「なにを！？」

久しぶりに会って  
会話した末が  
らしくない言われて  
俺はなんなんだよ！

漉音：

「…そういつお前は」

仙里：

「……………」

漣音：

「なにかも、  
変わっちゃいないな」

仙里：

「僕が変わり始める時、  
それは終焉ですから」

難しい言葉をさらっと

漣音：

「終焉て？」

仙里：

「…秘密ですよ」

玖珠：

「へー、秘密かあ」

何か後方に

黒い殺気を感じるぞ。

仙里：

「はい。……………ん？」

漣音：

「あ、おっさん」

玖珠：

「あ、おっさん…」

「じゃねえぞゴラァ！！」

お前ら…」

俺様の裏の秘密を

知りたくなかったら

手エ動かせー！」

仙里& a m p・漣音：

「は、はい」

### 《忠告の標》

仙里：

「じゃあ僕は

失礼しますね」

夕焼けの陽が

入り口に差し込む頃、

客も少なくなつて

仙里が解放される。

玖珠：

「あ、おい

ちよっと待て小僧二号」

二号ってなんだ。  
俺が一号か？

おっさんは  
レジまで歩くと  
千円札を二枚くらい  
取り出して  
仙里に差し出す。

玖珠：  
「ん、ほらよ。  
今日のバイト代だ」

仙里：  
「あ、別に  
そんな結構ですよっ」

玖珠：  
「いいから受け取れ！  
受け取らなかつたら  
環那といちゃつくぞ」

環那：  
「まあ」

漉音：  
「勝手にやってろ…  
じゃあまたな仙里」

仙里：

「由来君もお元気で」

それから数分後、

渚：

「ただいま

帰りました」

環那：

「お帰りなさい、渚」

2階にいた俺だが  
どうやら渚が  
帰ってきたらしい。

漉音：

「おっさん、たんま」

玖珠：

「なんだと？」

男が目の前の勝負から  
逃げ出していいのか？

漉音：

「ゲームだろ」

玖珠：

「…大乱闘だろ？」

某永遠の二番手と

称される緑の人気者に  
やられておけ。

そうしておっさんを  
無視しつつ下に向かう。

漕音：

「おかえり、漕。  
学校どうだった？」

漕：

「はい！なんとか  
クラスのみんなと  
打ち解けれそうです。  
河南さんとは…  
違うクラスでしたけど」

漕音：

「そっか」

ちよつと悲しくなる。  
去年まで漕と一緒に  
登校していた俺は  
今じゃアルバイト。  
まるで俺が残された  
みたいじゃないか。

漕：

「…漕君？」

涙…出てますよ。

どこか悪いんですか？」

それでも今も

渚の暖かな優しさを

俺は感じれる。

それだけで十分だ。

玖珠：

「こいつ、

頭が悪いんじゃないの？」

渚：

「お父さん！」

おお、ちゃんと

ボケずに怒ってく

渚：

「そうなんですか？

漉君は頭が

悪いんですか！」

漉音：

「なんでそう

つながるんだよ！？」

環那：

「まあ！漉さんは

頭が悪いんですか。

薬：薬：」

馬鹿に効く薬は  
ありませんよ環那さん。  
真面目に  
考えないでください。  
しいて言うなら  
馬鹿はこの一家だ。

それからのこと、  
風の強い日、  
雨の強い日。  
渚は行き際に  
笑顔だけ見せて  
家をあとにする。

でもその背中  
はどこか切なくて、  
昔のように  
変わらなく振る舞うのは  
嘘な気がしてならない。

漣音：  
「俺も人のことばっか  
心配してなんないな」

手に取ってみるのは  
コンビニにあった  
求人情報誌。

俺だっていつまでも  
ここにやっかいになる  
わけにもいかない。

次へ次へと、

進んでみなくちゃ  
わからないんだ。

漉音：

「…そういえば渚今日、  
部活説明会が

あるからって

盛り上がったな。

誰が入ってくれと

嬉しいんだけどな」

…不安の種は部長か。

ちゃんと説明出来るか？

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9979g/>

---

遙か先の道で～LIMITED～

2010年10月31日14時15分発行